ドSトンカチと泣き虫片手シリーズ

nakira

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンスターハンター

男ハンター×女ハンター（登場人物設定あり）

師弟関係にあるハンター２人のシリーズ。

※恋愛、性愛描写あり※

狩り色は濃くないです。

残酷描写は避けていますのでライトにお読みください。

舞台はクロス、過去舞台Ｐ２Ｇ。

（初出、某避難所。ｐｉｘｉｖとのマルチ連載中。加筆修正あり、こちらが最新）

目　次

蝕んだのはどちら　1
乱れ染めにし我ならなくに　15
夜半の月は疵痕を照らすか　26
恋ぞつもりて　36
たまの緒よ　48
身のいたづらに　59
娘立ちし日、空が哭く　70
しのぶれど　77
かのひとへ、天釣舟　88

蝕んだのはどちら

「ねえウル、早く早く」
寝不足の頭には少し煩い、高い少女めいた声がおれの頭にこだます。
「んなデカイ声出さんでも聞こえてる…」
「だって半分寝てるじゃん！　もうガムート近くのエリアにいるよ」
おれはウル、ポッケ村のハンターだが、ひょんな事からベルナ村におつかいを頼まれココット村におつかいを頼まれ（中略）、細々と採取ばかりの半隠居生活を送りかけていた。
金が入っても、ベルダーハンマーのレベルだけが上がっていく日々ってやつだ。
「咆哮聞こえるねー、行こか！」
こっちの物々しい白疾風装備の女ハンターはおれの後輩、シア。おれがおつかいの日々を送っている間、別なパーティで大型を狩りまくっていたようだ。
実は大の人見知りで、それを克服すべくおれの友人をけしかけてやったのだが、気に入られて狩りに連れだされていたという。
久々に会った一言目が「ハンターランクいくつになった？」だぜ？
ヒトケタだうるせーな。
答えたら答えたで集会所に引っ張られるし、厄日だ。
「せんせぇ！　危ないよ！」
「ほいほい」
ガムートさん初めましてと、咆哮のタイミングをはかり頭から突っ込むと、楽に滑り込め鼻に一撃。
頭が冴えて攻撃を擦り抜けるこの一瞬が、心地よく闘争心をそそる。大型モンスター、それも初見とくりゃあ仕方ない。
「頭だか鼻だかわかんねぇ、なッ！」
ドゴッ！と鈍い音が響くが、狙いを外した様で巨象の牙が欠けた。
一方シアは黙々と脚を片手剣で斬りつけている。ステップ巧く

なったもんだ、おっちゃんびっくりしちまったい。
　最初に会った頃は盾殴りを上手におれに当ててきたのになぁ。モンスターしか見えない不器用ムスメ、太刀持ってた時は流石にハンマーでぶん殴ってよく飛ばしたもんだ。
　なんて横目で流し見ていたら、シアめ上手いこと相手の攻撃をすり抜け、白疾風とかいうナルガ一式の尻をチラ見せしながらジャンプ斬り。
　だからな、幼児体型に毛が生えた程度のお前さんがそんなもん着るんじゃない。
　寒かったのか？色白の尻が少し赤みを帯びてる。ホットドリンク飲んでるくせに。
　ああ象コケた。頭頭。はいスタン、有り難うございました。

ー
ーー
ーーー

「まだ動けるもんだなぁ」
「なに老人みたいな事言ってんの」
「いやぁ、採取ばかりの毎日でしたからねぇ。隠居ハンター引っ張りだしやがって小娘ちゃんよ」
　子供扱いされたシアが頬を膨らませ黙りこみ、剥ぎ取りを続ける。
　おれもガムートを剥ぎ取り、大きく伸びをした。
「せんせー、私、上位ハンターになったんだよ」
「おー、おめでとさん」
「そんだけ？」
「採取ばっかの万年金欠ハンターに何かねだる気か？おーこわ、最近の若い子は…」
　むっとした顔で、ねえ、とシアは頭の天辺で結んだ長い髪を揺らしておれの顔の前にずいっと顔を近づけてくる。
「なんで、私のやってた駐在ハンターの仕事引き受けちゃって、大型討

伐から降りたの？」
「下手っぴな私が、元G級ハンターのせんせーを差し置いて大型討伐に抜擢される訳ないじゃない」
　そろそろかと思ったが、ド直球できたか。
「ずっと一緒に狩りに行ってたのに…私、せんせーと狩りたくて、いっぱい頑張ったんだよ」
　そうだねえ、昔はレウスの乗りも怖がってたもんな。
「防具が心許なくても、すぐ助けられるように片手剣練習して、せんせーの友達とも怖いけど狩りに行って、いっぱい教わったもん」
「ねえウル。私のこと、嫌いなの…？」
　おれは答えない。
　可愛がってきた後輩を独占すんのはマズイ。色んな人と交流して、こいつの糧に出来る様にって、理性で考えて。
　本当は、閉じ込めて、おれだけを見る刷り込まれた雛鳥にしてしまいたかった。
　んなきたねー自分も、見たくなかった。
「ウル…返事してよぉ！」
　おれは、返答代わりにシアの首に噛み付いた。
「ひぐっ…!?」
「もう、止まってやんねえぞ」
　場所を耳朶に変え、甘噛みしつつ囁く。シアの体が強張った。
「なんてな。さ、帰るぞ」
　やっちまったなぁ、サドなおれ、アカンぞ。と心の中で胸に手を当てる。
　モドリ玉をポーチから取り出
「ぶべっ！」
　何かに吹っ飛ばされた。
　おい、周りにモンスターはいな・・
　辺りをちらりと見回して、何故か抜刀しているシアが見え脱力した。
「お前な、このタイミングでそれはねぇよ、」

「ウルぅ…」
片手剣を放り出して、半泣きの小娘が首根っこにしがみついてきた。
「やだ、帰らない。まだ一緒にいる」
「いやね、目的達成してるし、さみーんだけど」
「私も寒いもん！」
吐く息も白く、少し歯が鳴っている。
ドリンク切れちまってるのね。って、考えなしだな昔から。
「あっためて」
「はい?!」
「寒い！　しぬ！　こごえた！」
「あほか、ちったあ考えろ小娘、おれもドリンク切れてんだよ！」
あ、とシアの口が開く。
一緒に洞窟に入る前に飲んだだろうが…実はおれも寒くてキャンプに帰りたかったのである。
「ご、ごめんなさい…」
「ホットドリンクもうねーけど?」
「私、1個あるから、せんせーにあげる」
はーん。
寒がりな上に露出の高い装備でよく言ったもんだ。
鼻とほっぺ真っ赤じゃんか、可愛いねえ。
おれは少しだけ、悪いことを考えた。

ー
ーー
ーーー

「重てぇ……」
漸く辿り着いた、雪の少ないエリア。おれは背負っていたシアをそっと降ろして、額に手を当てる。冷えてはいるが発熱はない、身体は大丈夫のようだ。

ホットドリンクなしで、雪山の頂上付近の極寒地は乗り越えたものの、その後おそらくスタミナ切れかシアがダウンしてしまったのだ。
シアがくれたドリンクでなんとか凍えるエリアは乗り切れると踏み、おれはかじかんだ太腿やら尻を揉む事すら忘れて一心不乱に下山してしまった。勿体無い。
でも、頭からそんな考えが消えちまうくらいには、コイツが大事だったんだなーなんて思ってむず痒くなる。
「さ、もうちょっとだな」
細い身体を背負い直すと、首に回された手が少しだけきつくなる。
「ありがと、ウルにぃ」
「…はいはい」
むかぁぁぁあしの呼び方で呼ぶな、恥ずかしい。
「あのね、」
「なんだよ」
歩き出すと、口ごもりながらシアが呼んでくる。
「私に挿れたいと思う？」
「はぁ!? 何を何処に何故に!?」
おいちゃん心臓がピキーンってなったぞオイ！
「マークスが、」
「何、付き合ってんのか？」
マークスってのはけしかけた友人である。掠め取られるのはちっと胸糞わりーが、まあ、しゃあねえわな
「寝てる時にベッドに来て、その…されたの…」
「お、おう」
「嫌って言ったけど、ウルの友達だし、どうしたら良いか分からなくて…ウルと連絡取ってくれてたの、彼だったし」
あー、そういう。
「気持ち良くなくはなかったけど、そういうの初めてだったし、もう分かんなくて、泣くしかできなくて」
語尾が震えて、ひぐひぐ言ってきた。面倒くさいから泣かないでくれよ…

おれが、たまんなくなる。
「ウルにぃと、したかったのに。そんな風に見てくれてないとは思ってたけど、」
「もう、はじめて、じゃないけど、ウルにぃ、おしえて」
初めて会った頃を思い出した。
引っ込み思案で人見知りなシアが、新しいモンスターが発見されたり、道具が開発される度に目を輝かせておれに「おしえて！」って言うんだ。
何度言っても「経験者に聞くのが一番分かりやすいし、参考になる」って聞かなくて。
「ウルにぃ」が似合わない歳だって言ってやったら「せんせー」になったんだっけな。
「好きな人とすると、どうなるか知りたいよ」
「…もう、喋んな」
ベースキャンプは目の前だ。

ー
ーー
ーーー

「恥ずかしいから、見ないで…」
「ヤダ、見なきゃ出来ねえ」
ベースキャンプのベッドで少し休ませたシアを、顔色が戻ったのを確認して非難されながら装備を外していく。
生傷のあまりない身体に、確かに彼女の狩りの腕が上がっている事を感じた。その過程に自分が居なかった事を思うと何故か少し苛立つ。
シアが恥ずかしがるので、背中側に回ってやり、取り敢えず軽く抱き締めてやる。
機嫌の良いアイルーみてー、ゴロゴロいいそう。目を細めて俺にもたれかかってきた。

「痛い、ウルぅ！」
「そうか？」
「そこはくすぐったいったら！」
　かじった耳朶から、今度は耳の輪郭に合わせて舌でなぞり上げる。抗議の声も、もう聞いてやらない。
　どこだったかの受付嬢っぽいインナーの下に手を滑り込ませ、胸を包む様に揉みしだく。しっかり手に収まってしまう辺りが笑えてしまう、が、泣かれると悪いので止めておくかな。
「こうやって乱暴にされたのか？」
「違う、けど」
「じゃあ、こう？」
「ひゃぁ！」
　くるーっと乳輪を指先でなぞり、問いかけと共に真ん中まで軽く潰す様にこねってやる。はい、いい声。
　もう片方も同じように柔らかく触れ、繊細な硝子細工か何かみたく扱うと、シアはひらひらとインナーのスカートがめくれるのも構わず、脚をばたつかせて喘いだ。
　顕になる内腿にも、手を伸ばす。吸い付く手触りに思わず大きく息をついてしまう。うまそう。
　そのまま秘所へ…という事はせず、ぎりぎりの所を掌全部で優しく揉んでやる。その間も、耳への愛撫は忘れずに。
「本当にもう処女じゃないのか」
「私だって、ウルにぃにあげたかったもん…しょうがない…んっ、でしょ、ぁん…」
「これから挿れるおれ以外に一本、アレ知っちゃってるって事だよなぁ」
「ほ、本って数えないの！下品…だよぉ…やん」
「ん？　その下品なおれと、シアは何したいんだっけ？」
　シアの耳が赤い。きっと顔も赤い筈、消え入りそうな声がぽそぽそ聴こえる。
　あー、いいね、分かりやすくて。

「聞こえない」
鼠径部に指を這わせて、ついでにインナー越しに秘部のぷにぷにしたとこに悪戯を仕掛けてやる。
身体を震わせて高い喘ぎを漏らすシアだが、その先までの刺激はお預けだ。
「え…っち、て、こんなに意地悪にされるもの、なの？」
「んー？　あなたさんはどうされたのよ？」
我ながら意地悪いと思うが、友人に寝盗られたからには色々と思う所ある訳で。
可愛い小娘に報告して貰おうじゃないですか、ねえ？
存外気持ち良く、気に入った内腿を揉みしだきながら、うーうー唸るシアの白疾風ポニーテールを眺める。
「もっと、気持ちいい所だけ触って、その、アレを舐めさせられた。で、挿れた、かな。ねえ、これでいい？」
「ま、いいとしますか。で？」
振り返りこちらを窺うシア。目が合うとびくっと身体を震わせた。草食竜かお前は。
「それ、きっとよくないよね？」
「お、シアでも分かったか」
「ウルにぃ、そんなに意地悪かったっけ？」
おれは、おまえがいぢめたくてしょーがないんです。
「おっぱいは、インナーの上から、も、揉んで、」
「はいはい」
太腿から手を離し、シアの言う様にインナーの上から小振りな胸を揉む。が、すぐにインナーの下へ。
直接、弱いらしい先端を優しくこね回した。
「あんっ！　や、ウルにい、気持ちいいっ、よお…」
「ほれ、次は何されたの？」
「おんなじ感じで…でも、ウルにぃのがぁ、きもちぃ…んぅ…！」
「じゃあ、もっと気持ちよくしてやるから、脱ぎな」
はひぃ、と目を潤ませたシアが、こちらを向き直る。躊躇いもせず

肩紐をずらし、胸部を覆っていた布を引きおろした。
　あらまあ、んなエロい仕種何処で覚えたんかねぇ。
「あ～っ、あっ、やあん…なんで、ぞわぞわするよう…！」
「舐められるのは嫌いなのか？」
「わかんなぁ、い…でも、指よりいいっ！」
　うーん、惜しいねえ。
　むくむくと悪戯心が頭をもたげ、乳輪を舐めるだけの動きから、先端を舌先で潰しこねてやると、喘ぎと共にシアの腰がもじもじとうねった。
「次は、インナーの上からぁ、あ、お尻を触られてぇ…」
「尻だけでいいのか？」
「まだ、はじめは、それだけぇ、だったぁ…」
　ふーん、こんなに美味そうな肩甲骨があんのにねえ。マークスの目も節穴だな。
「あんんっ！　え、いた、くない…!?」
「おや、こんらとこ齧られて、舐められて、きもひいいんか？」
「うん、背中ぞわぞわ、すごぃ！　きもちぃい、かもっ…いや、いやぁ！」
　向かい合っていたシアを押し倒し、横に転がす。自分も横になり、白い折れそうな背中を舌でなぞり、肩甲骨に噛み付いてやった。良さそうに鳴き出したので、尻も一緒にさわさわとソフトに触りだす。
「どうしよ、ウルにい、ウルにいの全部が気持ちいいのかも…」
　必死に喘ぎを噛み殺しながら、可愛い小娘が振り向き呟いた。
　ま、及第点としてやろうかね。

ー
ーー
ーーー

「あーっ！　あっ、やぁ…もう、出ないよ…っ」
「ん？　もっと気持ち良くグシャグシャにしないと痛いかもよ？」

「もっ、ぐしゃぐしゃぁあ！　ゆるひてぇ…」
　只今、触れるか触れないかの焦らしから始まり、シアの秘部に指が2本入っております。
　やはり少しきつく、更に生来のものか入り口もきついシアの此処。もう少し慣らしてやらないといけないと思い、実行に移している。
　本人はすっかり半泣きで、自分を翻弄する快感について行けてない様子だ。
「ベッド、汚れちゃうよぉ…」
「シアの汁でな」
「やだやだ、んな言い方、しちゃらめぇえ…うう…」
　あれからシアを横たえたまま、脚を広げさせておれの脚に乗せた格好で愛撫を続けている。鑑賞者のいないショータイムってやつかね。それは淫靡なもんだろうな、おれも見てみたいもんだ。
　ま、おれとシア以外に演者なんていらねーけど。
「あ、や、何かくる、きちゃう…っ！」
「あー、お汁溢れさせちゃうのかねぇ、シア」
「ひぅうっ！　にゃぁぁぁぁあ！」
　秘部の突起もこねてやると、中の刺激と相まって、シアの中が絶頂できゅうっと締まる。その後も挿入していた指の抽挿を止めずにいると、ぴしゃ、と掌にさらさらした液体がかかった。
「シア、イクのと潮ふくのはホントは別物なんだぞ。今から両方連チャンしちまってどうする」
「しょんらの、しやない…も、ウルにぃ、きてぇ…」
「来てって？　アイツにどうされたかちゃんとおれに教えな」
「はぁっ、あ、中に、アレをゆっくり挿れて、収まったら動いて…」
　前を寛げて、おれの立ち上がったモノを取り出す。ベルダーみたいな衣服型の装備は楽だな。
　しっかし、まだ臨戦態勢とまではいかねーんだよな。
「シア、おれはまだ準備が出来てないんだが」
「え…あ、やだ、おっきいのに」
「大きかろうがまだ7割程度なの！　お口開けて頂けます？」

シアはよろよろ起き上がり、膝立ちになって尻に手を回して抱きつき、俺のモノにキスを落とす。
おやおや、ご奉仕される体勢だな。
「シア、気持ちいい所分かるか？」
「ん、ちゅ、先っぽと、首んとこと、裏側ぁ？」
「正解。こりゃがっつり銜えたとみた」
「あぐぁ!?　けふっ、がっ、はふっ」
頭を押さえて動かすと、少しだけ固い感触がしたものの、すぐ力が抜けて肉壷に似た感触になる。何かしようとして叶わない様な動きで、舌が焦らしてんのかというぐらいの小さな動きでモノに這う。
順応性◎っと。流石おれの後輩だな。
「ぷはっ、ぁ、はあ、はあ…」
「次はお前さんがちゃんとするんだぞ」
「はい、ウルにぃの、舐めたい…」
「涙目で涎零して…口で感じる淫乱なのか？　今日は時間ねーから今度な」
ふぁい、と蕩けた返事をするシアを押し倒し、内腿を揉んでから（気に入った）、膝裏を掴んで秘部を曝け出した。ついスムーズに行くまま押したものの、膝が楽に胸につく…
「身体軟らかいな」
「そう？　こんな格好した事ないからわかんない…」
「眼福だわ、凄いヌルヌルなの丸見え」
文句を言おうとした口を手で塞ぎ、先走りで少しぬめった切っ先を擦りつけてやると、つぷっと音を立てておれのがシアの中に飲み込まれていった。
「んむぅぅぅ、ふぐっ、はぁっ！」
「ちゃんと息しろよー」
「はっ、あっ、ああっ…ねえ、ウルにぃの、大きいよ…くるし…」
「まだ半分ちょいだ。慣らしてやっから待ってな」
さっきから、おっきぃおっきぃって…処女に毛が生えた程度で何を言うか。

ゆっくりと腰を進め、きちきちとでも言いそうな入り口付近から、またゆっくりと引き抜いてを繰り返す。
慣らしだというのに、シアは目に涙を溜めてひっきりなしに息を吐き、思い出した様に吸い込んでいる。
痛いのかと聞くと、ブンブン音がしそうなくらいに首を横に振った。
「あのね、ウルにぃとするえっちは、こんなに気持ちいいんだぁって…」
「……」
「あの時は、こんなにっ、濡れなかったし…痛かったんだよ…」
まったく。
「いやぁっ！　いきなり挿れちゃいやっ、あ、変だよぉ…またくるっ…！」
「…全部欲しかったんだろ？」
「うんっ、うん！　ウルにぃの、ちゃんとシアんナカいれてぇ…！」
不味いな、今日はちっと早いかも。
おれは言いつけ通りに膝裏に自分で手を回して、見せつけている格好の彼女の手を外してやった。
「掴まってろ」
「ふぁひ…ウルにぃ」
細い身体を引き上げ、挿れたままおれの膝の上に乗せる。
ずるっと中のモノが動くと共に、シアが大きく悲鳴を上げた。
「へんらのぉ！も、や、いくぅ…！」
「ほら、イけ」
「やぁぁあ、にぃ、ウルにぃと一緒！」
対面で突き上げる度、涙交じりの嬌声を上げながらシアが駄々をこねる。
「なんで？」
「も、おいてけぼり、やだぁ…ウルにぃといっしょがいぃ…マークスも、先にいっちゃう…」
おい、色々とごちゃまぜになってませんか、小娘ちゃんよ…

「じゃあ、お望み通りにご一緒させて貰いますが」
期待してるのか怖いのか、シアの脚が腰に絡まる。
おれもシアの尻を掴み、耳元で囁いた。
「おれより先に何回イくかな？」

ー
ーー
ーーー

「っこい、しょっと」
何かデジャヴを感じるな。
クエストを終えアプトノス車に揺られて、疲れか眠ってしまったシアを家までおぶって連れ帰り、ベッドに下ろすだけのお仕事。
「よーイッたねぇ」
おれに下から突き上げられ、快感の閾値に達したのか最後はイく事も出来ずただただ喘いでいた小娘。
装備だけ外してやり、ガウシカテールに結んだ長い髪を解く。
何故かそうしたくなって、真っ黒な髪を一房掬い取って弄んでいると、顔に触れたのかシアが目を覚ました。
「ウルにぃ…」
「お前さんちまでお送りさせて頂きました」
「あ、ありがと…！　後、ごめん、なさい」
「あ？」
何に対してのごめんなんだか。
ま、ぶっちゃけ謝る側は、おれな気がするけど気にしない。
「ウルにぃの気持ちとか、考えずに色々ワガママ言って…幻滅したよね…」
「でも、一緒にいたいのはホントなんだよ！　ウルにぃとだけなの…」
また、泣くんかな。
「その顔、おれだけに見せろ」
あー言っちまったよ、と心の中で舌打ちし、認めたくなかった悋気

とゆーやつをお迎えする。
「じゃあ、またいっぱい気持ち良くしてくれる？」
「お、経験値が２本になったら言う事が違うねえ」
「ウルにぃ！」
口を尖らせた小娘に反論する暇も与えず、おれは初めてシアに口付けた。
「お前さんは、喘いでる時が一番可愛いよ」
俺の下で、な。

ｅｎｄ・・・

乱れ染めにし我ならなくに

ディノバルドなんて行ってる訳ねーだろ。と呟いてしまったが為に、おれは後輩にタマミツネ狩りに連れ出されている。
いい加減貰った服で狩り出来るレベルじゃないでしょー！と、物々しい白疾風一式を着たシアに説教され、嫌々ながら渓流で3日程連戦しているのだ。
防具を一式作るには金が足りないので、水属性武器を作ってやろうという訳ですはい。
逆鱗はぽこすか出るのだが、爪のやつが足りないって良くある現象に陥っている訳ですはい…
「ウルにぃ、いつまでベルダーハンマーなの？」
「あ？　強化に強化を重ねた、採取と小型討伐の相棒なんだよこいつは」
今言った通り、おれはつい先日まで村という村のおつかいをこなす駐在ハンターだった。後輩のシアに経験を積ませてやる為、就いたポストではあったが、だいーーぶハンターランクが離されるくらいにめんど…いや、やり甲斐のある毎日だった。
「大型なんか久々だから、疲れちまうんだよ」
「あ、う。ね、ほんとは嫌だった？」
「いーえー、お付き合い下さり助かりますー」
ウルにぃ…と足を止めたシア、眉がハの字でちょっと泣きそう。
この顔が、たまんねーんだよな…別にわざといじめてる訳ではないぞ、多分。
「はいはい、今日で終いにしましょうねー」
「ウルにぃが爪剥いでくれれば、すぐなんですけど」
フォローのつもりの一言に、むくれてシアが言い返してくる。
口を尖らせて、ぷいっとあちらを向いた様子に、自然と笑みが零れた。
あ、物騒な方面で。

「おいこっち来な後輩、身ぐるみ剥ぎ取ってやる」
ひっ！と息を呑んだシアが渓流４番へ駈け出した。水辺の近くのエリアで、タマミツネ…泡狐竜がよく目撃されている。今日も今日とて、そこに居るんだろうなぁ…ご苦労なこって。
おれも後を追う。遅れを取ると面倒だからな。

ー
ーー
ーーー

面倒事がまさに起こっております。
「きゃー！　うー、あわわわ」
「だから乗るタイミングをよく考えろっつったろ！」
「ごめん、ごめんー！」
シアは、乗りがあまり得意ではない。優しい言い方をするとこうなるが、昔は酷かった…
後先考えず段差からジャンプ攻撃当てて跳ね飛ばされたり、怒り状態で咆哮受けてひいひい言ったり…
今日は後者の様である。
「解放済みハンターの癖に、ちったあ成長しろ…」
おれのランクの何倍あんだ、全く。
ため息をつきつつ、支援の体勢に入り泡狐ーーもう面倒だから略す。泡キツネだあんなんーーの暴れるタイミングで脚にハンマーを振りおろし、隙を作ってやる。
ざくりざくりと剥ぎ取りナイフの音が聞こえ、それと共に泡狐の悲痛な雄叫びが響いた。
どうにかこうにか、ふらついたヤツが倒れこんだ時に頭に体重を乗せた叩き付けの一撃をくれてやると、体勢を立て直したシアがすかさず尻尾に回りこむ。
「ちゃんと斬れよー」
「はいっ！　多分！」

多分て。斬れなかったら後でお仕置きだな。
と思ったのが伝わったのか実力か、シアの連撃で斬り飛ばされた尻尾が弧を描いて落ちた。あら、意外に頑張ってたのね…て、ライゼクスの雷属性、しかも上位の武器だしな。
片手剣は手数で属性を叩き込むのが定石だから、弱点属性をしっかり把握し攻撃チャンスをものにできれば他の武器に引けを取らない攻撃力がある。ただ逆に言えば、他の武器以上に手数が出せなければ上回る事は出来ない。
ま、おれも多勢に漏れず、最初に手に取った武器が片手剣だっただけですがね。
でもシアちゃんめ、まだまだだな。
怒り狂った泡狐が咆哮し、残った尾の根元を振り回し叩きつけてきた。
半歩回避が間に合わず、おれは突っ込む形で薙ぎ払いを喰らい吹き飛ぶ。
「ウルにぃ！」
「来るな！　ヤツを見てろ！」
今にも駆け寄りそうなシアを留め、納刀しすかさず飛んできた泡を前転回避する。右半身が痛みに軋むが、ヌルヌルになるよかマシだ。
「きゃぁああ！」
シアの悲鳴と共に身体が軽くなる。生命の粉塵を飲んで貰った様だが、何故お前が泡を喰らってヌルヌルになってんだよ、おい！
「あれっ、何か身体が軽い？」
んな訳あるかい、と面食らったが、確かに身体に付着した泡狐の泡によって滑るお陰か、元々小回りのきく片手剣のシアも氷上を滑る様な動作になり機敏さを増している様子。
「マークスが言ってたの、ホントだったんだ！　タマミツネの泡で回避が上手くなるって」
シア本人驚きつつ、泡を纏ったまま泡狐の硬い爪へ定点攻撃を始める。
おれもモンスターの攻撃として常識外な事実に少しびっくりしつ

つ、花の様なひらひらしたヒレをはためかせる頭を再度狙う。
近づいてみると、こりゃ……
「ぬるぬる、ツヤツヤ、テカテカ」
「なに？」
「こっちの話」
何故か石鹸と同じく、泡は透明に虹色を滲ませた泡が露出の高い白疾風装備に纏わり付いている。
胸元は装備で隠れているものの、それが攻撃などの動作で少しずり上がった際、胸の膨らみが…所謂下乳がちらりと見える。
ちらちら見てても頭に攻撃を叩き込める自分が怖いぜ、なんてな。
「爪いくー！」
「おー頭いくー」
短いが、十分な伝達。
初日に爪を壊せず、おれに旋毛グリグリ押しの刑を喰らったシアは、昨日から罠師スキルを付けている。今日もいけそうなタイミングで罠を使うだろうと踏んでいた。
頭に向けハンマーをかち上げて、落とし穴の設置を終え再びブレイドダンスーー片手剣の苛烈な連撃を浴びせる狩技ーーを浴びせようとしているシアに向かって飛び込む。
自殺行為じゃあない。最近編み出されたブシドースタイルってやつだ。通常の溜め攻撃の最終が出せなくなると引き換えに、攻撃の一瞬前に回避行動をする事で強力な溜め攻撃が出来るのだ。そしてそれは、面白い事に味方の攻撃にも作用する。
シアも同じくブシドースタイルで、片手剣の場合は回避が発動した際、反動でジャンプし追加攻撃が出来る。つまり、モンスターに乗りやすいって訳だ。
ま、乗りやすいってだけで、人によっちゃ成功率まではお察しだけどな。
するりとシアの攻撃をすり抜け、おれは罠に嵌った泡狐のひらひら頭へハンマーを振り上げ叩きつけ、また振り上げスタンを取る事に成功。

後は頼むぞ後輩ちゃんよ。
おれがそのまま流れでハンマーを振り上げ、力を込めてアッパーを食らわせてやっていると、バキッと鋭い音を立てて己の武器…爪が砕かれた泡狐が悲痛な叫びを上げ仰け反る。
「いやったー！」
あー喜んじゃってまぁ。
いや、おれも嬉しいですよ？
武器制作に必要な素材は後、爪1本なんでね。
とか思ってたら、シアめ勢い余ったのかおれの前に……
「きゃふっ！」
かちあげちまったよ。
しかも泡狐に乗っちまったよ。あーあ。
怒り狂った泡狐にしがみつき必死なシアだが、こりゃ失敗するな…
タマミツネの動きは単調とは程遠く、こちらが翻弄されやすい。スキこそでかいが、一撃の威力も同じくだ。
「よっと」
「ウルにぃ、たぶっ、ほかっく、ひぎぃ！」
舌噛んだな。
まあ、言わんとした事は分かっているので（しかももう行動に移している）、泡狐の意識がシアに向いているうちに捕獲を試みてみますか。
シビレ罠は無事足元に敷け、頭から尻尾まで満身創痍の泡狐に捕獲用麻酔玉を投げる。
怯んだ泡狐が暴れ、シアがとうとう宙へ放り出された時、罠にかかった泡狐は動けず麻酔の餌食となった。
「ぶへっ！」
シアが、ずしゃあ、と草むらに落ちる。
え？　受け止める訳ないだろ。的確に体力を見定めないといけない捕獲ってやつぁ、結構大変なんですよ。
「ウルにぃ、いだぃぃ…」
「回復薬飲んどけ」

「冷たい！　せんせー教師失格！」
ちょっとむかついたので、座り込んだまま回復薬の蓋を開けたシアに近付き、薄く開いた口に人差し指を捩じ込む。
「ふぁが?!」
「その舌、ちねってやろうか?」
目を見開いたシア、ちょっと抵抗しようと顎に力が入ったが、その大きな黒目がちな瞳を見つめてやるとすぐ緩められた。
宣言通り、親指も口内に滑り込ませて、怯えて微かに震える舌を挟んでやる。
舌を噛んでいたから、きっとこれだけでも痛いに違いない。少しだけ良心が疼き、力を緩めてやる。
「ふういぃ…」
「下手っぴな乗りの罰」
「やらぁ…ほへらしゃぃ…」
無理に喋るせいで、涎が口の端にまで溢れ、ぽたりと顎を伝って装備の胸部分に落ちる。あー、剥いてやりてー。
眉を寄せて、涙を溜めて涎を零して哀願する可愛いおれの後輩。
「続きは夜にな」
優しく指を引き抜いてやり、目の前で自分の指を舐める。
今からアプトノス車で帰れば、ギリギリだがユクモ村へ夜明かしせず着けるだろう。
目を見開いたシアが、さっと頬を染めるのに気を良くし、おれは彼女の唇に溢れた唾液を舐め取った。

ー
ーー
ーーー

「ああ、シアではないか！」
意気揚々と渓流から帰還したおれ達に、一人の男が声を掛けてくる。

「エルドさん！　ユクモ村に来てたんですね」
「うむ、この村の武具加工屋が、防具を編み出してくれてな」
　桐花という、古龍の血で磨いたユクモ村の雰囲気に合う武者鎧の一式防具を紹介しながら、頭装備を外して小脇に抱えた男が親しげに話し掛けだす。
「して、マークスは一緒ではなかったのか？」
　シアの周囲におれしか居ないのに気付き、エルドと呼ばれた男が問う。
　待て、聞き覚えがあるな…エルド…
「あんた、もしかして『捕獲王』のエルドか？」
「おう、その渾名で呼ばれるのは、こそばゆいのう。ちっと捕獲だと報酬が弾んで貰えるってだけだ」
　長髪を無造作に括った無精髭の男が、からからと笑う。
『捕獲王』、相棒と呼ぶべき一種、使い分けたとしても二種の武器が主流な一般ハンターの間じゃ珍しく、多彩な武器を使いこなし、苦手だと言うものさえ腕前もそこそこ。
　その上、普通は難しいとされるモンスターの捕獲を、ほぼ毎クエスト成功させてくる強者だという。
「では、君がシアの言う師という訳か」
「『捕獲王』にそう呼ばれるのは、それこそ、こそばゆいでは済まないですがね」
「聞いた通り、口の減らない男だのう！　まあ今度、飯でも食ってクエスト一緒に行こうや」
　相棒が呼びに来たらしく、遠くの人影に手を振って応えながらエルドが去っていく。
「マークスの知り合いで、一緒に何度かクエストに行ったんだよ。ウルにいも今度いこ！」
「ああ、そうだな」
　自分自身理不尽だと思うが、少しだけもやもやしたものが胸に巣食う。
　おれも、ベルナ村に拠点を移してから皆と同じにスタートを切って

いたなら。
ハンターランクの解放という制度が生まれ、かつてのG級ハンターも揃って一からギルドカードが更新させられた。
脅威となるモンスターも以前より増え、かつての一張羅装備も役に立たないようなものだった。
マークスを始めとする仲間とランスを振るっていたのも、もう季節が一巡りしそうな程前か。
「ウルにぃ…お腹減ったの？」
そういや、ハンマーを使い出したのは、太刀背負ったペーペーだったこいつにこかされまくったからだったっけ。
「別なもんが減った」
黙りこくったおれを、シアが不思議そうに見上げてくる。
腹も減ったが、昼間の続きといきますか。

ー
ーー
ーーー

ユクモ村、共同温泉。
狩りの前の景気付けに、疲れを癒やしにと人気である。最近は足湯が人気らしいが、やはり昔を知る者としてはこちらがいいな。色々と都合もいい。
「ねえ…ホントにするの…？」
「ん？　早くしないと誰か夜風呂しに来ちまうぞ」
「うー…」
共同、つまり混浴温泉の為、ハンターは湯浴み着の着用が義務付けられている。ユアミ装備なるものが作られるくらいだ、人気もあるんだろう。
そんな湯浴み着の前を緩めて腰で留め、シアが露わになった胸元を泡立てた石鹸で覆いだす。
いや、ちょっとタマミツネになって貰おうかとね。

「こうでいい…？」
「やってみ？」
　恥ずかしさと不安でか、かなり躊躇いがちに、洗い場で椅子に腰掛けたおれに寄り添ってくる。ぎゅっと目を瞑って、おれの腕にささやかな胸の膨らみを当てて上下に動き出した。
　吐息が漏れそうになったのか、すぐに口が閉じられ、切なげな鼻呼吸になる。泡の摩擦が絶妙なクッションとなり、感じやすいのかシアも胸の頂きを意図的に当てては唇を震わせていた。
　性感帯でも何でもない腕ではあるが、固くなっていくシアの胸の頂きを感じ、面白いっつか、なんつーか。まあちょっとおれのアレも元気になり出す。
　その間にも腕から背中にターゲットが移り、泡まみれにされていく。当てる部位に合わせて形を変えながらシア自身も高まる胸に気を良くし、おれは目を閉じて感触を追う。
　気がつくとシアが股の間に入り込んできて、おれの胸板にその小さくて柔らかいものが移動していた。
　目を開ける。唇を噛み締めた童顔が、丁度おれの顔の前にあった。
「あ、見ちゃ、ダメ！」
「見せたくて正面に来たんじゃねぇの？」
　違うもん、と目を逸らす。
「おいで」
　横顔に向かい囁くと、頬を紅潮させたシアがパッと振り向く。が、ハテナマークを浮かべてこちらを見つめているので、立たせて腰に手を伸ばし、湯浴み着の下に履いているショートパンツを引き下ろした。
「ふぇっ?!　ウルにぃ、なにす」
「ココでしねぇの？」
「だ、誰か来ちゃうよ…」
　目が泳ぐシアは放っとき、石鹸を泡立ててさっき指差した部分へと塗りたくる。ちょっと楽しい。
　タオルの様な湯浴み着を腰に纏わり付けただけの格好で、下半身も

泡まみれになったシアの出来上がりだ。
「ほら」
ポンポンと膝を叩き、それでもうーうー言いながら前を隠しているシアの尻を引き寄せて、おれの腿に座らせた。
何か言いたげだが、こちらも目で促してやる。少しの間睨み合いになったが、おれが負ける訳もなく、シアは目を伏せて前後にゆっくりと動き出した。
「ん、んんっ…ふ…ぁ」
「んなゆっくりじゃ夜が明けちまうぞ」
「むりぃ…きもちくって、だめ…ぇ…！」
全く、誰の罰なのやら。気持ち良くなりやすくっていけないねえ、この小娘ちゃんは。
おれの肩に手を置いていたのを首に回させて、目を白黒させたシアの脚を開かせ抱えて、対面座位の格好にする。
が、今日はお預けだ。
「しっかり掴まらないと頭から落ちるぞ」
「あひゃっ！　いっ、ウルにぃ！　何これ、ぬるぬりゅっ…」
「おや、ちゃんとおれを気持ち良くさせてくれなきゃ困るんだが？」
「ふぁっ、ウルにぃのと擦れてっ…だから、しょうがらいのぉ…」
実況して頂いた通り、おれのモノを挿れずにシアの秘部に擦り付け、一緒に泡泡ヌルヌルになっとります。
うっかり挿れたらお仕置きにならんので、今や涎を垂らしだした下の口ではなく、ぷっくりと存在を主張している突起を中心にしっかりと、シアの腰を前後させて泡を塗り付けている次第。
「あっあっ、はぁっ…！」
「おい、まだイくなよ」
「だめっ！　も、きもひぃ…いッ！」
「あ」
おれに抱きついてピクピクと震え、絶頂を迎えたシアの体の力が緩まるのが分かる。
「泡なんだかお前さんのなんだか、分かりゃしないな」

初めての感覚に返事も出来ない様子のシア。まあ、しゃあないのでこのままモノをシアの身体に擦り付け、摩擦を楽しみながらおれもイく事にする。丁度軽く脚を閉じたので、太腿なんかも挟むと柔らかいんだなこれが。

流石タマミツネ流、これはちょっと気持ちがいい。

「ウルにぃ、でる…？」

「ん、ああ…」

「くち、ちょうらい」

「……!?」

蕩けた目をしたシアが、手を離して自分で跪いた。ぺたっと一人で座り込んだと思ったら、見上げてそんな戯言を吐きやがる。

あらまあ、2回目でこれですよ。とんだ淫乱だな。

さ、口を開けな。

「っ…！　あ、んっ…んぐっ…」

おれは立ち上がり、モノを軽く扱きシアの幼げな顔に向け白濁を撒く。

開いた口では受け止めきれず、跪いた拍子に頭に巻いたタオルが解け、アップにしていた腰まである髪に精液が飛んだ。

「ウルにぃの、へんなあじ…」

「うるせ、皆おんなじよーなもんだ。美味かったら嫌じゃねーか？」

「ウルにぃのなら、だいじょぶだよ」

口周りを拭いながら笑った小娘が、ちっとばかし可愛かったので。

おれは勢い良く掛け湯をし、さっさと身体を流せと湯に浸かりながら捨て台詞を吐いた。

ｅｎｄ…

夜半の月は疵痕を照らすか

ボク、オトモアイルーのリンだニャ。
旦那さんのセンセイの武器、狐鎚ツキヲイザナイのレベルアップの為、ボクらの旦那さんは今日も狩りに出掛けているのニャ。
「今日は渓流にジンオウガが出て、足湯の番台ニャンが困ってたから丁度良かったニャア」
「何かナルガクルガも行くとか言ってたから、また帰りが遅いのニャ」
「モンニャン隊も帰ってくるのにニャー、暇だニャ」
井戸端会議をしているのは、旦那さん達二人のオトモアイルーニャ。
ずっと旦那さんと一緒にいるボク、アイルー柄の青い眼のリン。
珍しい淡い緑色のシマシマ柄、のんびり屋の回復担当ハクサイ。
旦那さんのセンセイのオトモ、ファイトの黒メラのネルとアシスト上手な真っ白シルビア。
ボクらは留守番仲間として、集会所で旦那さん達を介して知り合い仲良くなったニャ。
旦那さんの家でずっとキッチンアイルーとして働いていたボクは若干先輩なので、ベルナ村に越してきてから色々と皆に教えてあげているのニャ。
「うちの旦那さん、とことん大型モンスターの依頼が無かったから、イャンクックとか鳥竜達しか狩ってなくて…シアさんには苦労かけるニャア…」
「いーのニャ、うちの旦那さんはノンストップで駆け上がり過ぎたのニャ。村の皆の依頼も受けないと、この先大変ニャし」
シルビアが独特の間延びした口調で謝り、ハクサイがびしっと旦那さんをこき下ろす。最近定番のやり取りニャ。
「しかし、大型モンスター狩りになってからオトモさせてくれニャいニャー。最近やっと作ってもらった武器がサビちゃうニャ」

どんぐりメイルのネルが言えば、ウルクステッキとウルク装備のフード耳を振り振りシルビアも溜息をつく。
「『頭の向きがブレる』って一言で却下されたしニャア…」
「そうニャ！　普段２匹連れて行く癖に『不確定要素はシアだけで充分』とか言っちゃってニャー！」
２匹がヒートアップしてきたのに、旦那さんとお揃いの白疾風装備のハクサイが少し考えて、ニヤリと悪そうな顔をしたニャ。
「よし、ニャンターするのニャ！」

ー
ーー
ーーー

渓流、夜。
満天の月の下、雷狼竜ジンオウガが断末魔の雄叫びを上げた。
「お前さんの頭は高えんだよッ！」
ちょっと試しに使ってみたエリアルスタイルで、ベルダーハンマー（レベル５まで強化済みの相棒）でぱっかぱっかスタンプしたり頭を殴って乗って、シアの麻痺属性片手剣　デスパライズが２回仕事しそうなくらいで足を引き摺るジンオウガ。
うーむ、やはり狩猟経験のあるモンスターは安定して立ち回れるな。ベルダー装備まだまだ現役。
「捕獲？」
「いや、これなら討伐だな、すぐ倒れるだろ」
エリチェン際に追い縋ろうとするシアにそう返すと、一呼吸ついて回復薬を飲む。
「もう一回麻痺くりゃ仕留めたんだがなぁ」
「むー！　下位クエストの個体に何言うの、大体そこまでやれたら相棒の火力の問題だよー？」
「あぁん？」
「そこまで腕が落ちてる訳ない、と私は信じてるんですけど」

悪戯っぽく口の端が上がった笑みを浮かべ、小娘が抜かしてくれた。
「まあ間違いではない」
シアが取り出した砥石を照れ隠しに奪い取って使うと、わーちょっと！　ばかぁ！とすぐに余裕の笑みが崩れる。カンタン。
さて、タイミング悪くペイントが切れてしまい、怒りも解け弱ったジンオウガの気配は薄くなる。弱ったら巣に帰るはずだが…
ひとまず巣を目指し、シアを伴いエリアを移動する。
「ウルにい、次の防具何作る？」
「あー、あんまモンスター素材はねぇな」
こんな事を、昔やりとりした気がする。おれが言い出す方だったけどな。
重い防具は嫌いと抜かすシアにゲンコツくれて、腕が伴うまで樹海のナルガクルガに放り出した事もあったなー。
本当に、昔の話だ。
……ちっとばかし、真面目にやるかな。
エリアを変え、渓流らしい水の流れるエリアに足を踏み入れる。
この先が飛竜の巣ではあるが…
遅れて着いてきたシアが辺りを見回し、元きた道と近い獣道の前まで歩いて行く。
ぼう、と輝く何かが光りながら現れる。
おれはシアの名前を叫びながら飛び出していた。
「きゃあっ…！」
「ぐっ、」
一体何処に潜んでいたやら、ジンオウガが丁度エリアに飛び込んできた。やはりあれは、纏った雷球だったか。
突き飛ばしたつもりが庇い切れず、シアの砕いた爪が目立つジンオウガの腕が彼女の肩を打つ。
おれもベルダー装備の肩布が弾け飛び、そこそこ丈夫な筈の頭の巻布が千切れ解けてしまった。咄嗟にかなぐり捨てたそれはジンオウガの視界を塞いだようで、おれ達が体勢を立て直すには十分時間を稼

いでくれた。
ベルダーターバンだった布を振り落とし、ジンオウガが怒り状態に移行して幾度目かの咆哮を上げる。
「その吠え、もう一度…断末魔にしてやらぁあああ！」
溜めたベルダーハンマーのアッパーが、まともにジンオウガの頭に命中。
泡を食った形で、頭に血が上ったのか即座に頭突きをかまされる。攻撃自体は避けたものの、伸びっぱなしで括っただけのおれの髪が解けて散った。
すかさず叩きつけ、叩きつけ。その間も雷球が舞い、肩まであった髪が束で焼き切られる感触がするが、構わず殴り続けた。
漸く、パリパリと周囲を浮いていた電気も静かになり、ジンオウガ自体も倒れ伏した。
……ったく、手間かけさせんじゃねーよ。
「大丈夫か？」
「ウルにぃこそ…装備、ボロボロだよ…！」
へたり込んでいたシアは確かに、強く打った衝撃こそあったものの、怪我としては打ち身だけのようで。白疾風の二つ名を冠するナルガクルガの防具だけある、というところか…
庇わなくてよか…いや、んな事はねーけども。
「にぃ…」
ああ？と返事をする前に、やっぱりシアが抱き着いてきた。ちょっと肩がいてえ。
「髪、切れちゃった…」
「散切り頭だなー、まあ邪魔だったし良いさ」
毛先とかは整えなきゃダメだろうけどな、まあ。
しかしまあ、久々に涼しいねえ。
首元に刃を当てられているような、薄氷の上を歩くような。
命のやり取りをしている事を、思い出した。
おれ達はーー狩人だ。

ー
ーー
ーーー

「ニャハー！　ジンオウガだニャ！」
「死んでるニャア…もしかして、あの受付嬢さんクエスト間違ったニャア？」
「ムーファのぬいぐるみ！とか言いながら大興奮だったニャ、有り得なくはないニャ」
　ボクらは渓流のアオアシラを懲らしめて、ついでにハチミツなんかも頂いてこようと４匹でロイヤルハニーの納品クエストを受注したんニャが、、、
　パニックになるネル、考えこむシルビア、溜息をつきながら剥ぎ取りをするちゃっかり者ハクサイ。
　ぶんどりスキルは剥ぎ取りにも使えるのニャね…でもきっとルール違反ニャ、ハクサイ。
「どうするのニャア？　リタイアするのも何か腑に落ちないニャア」
「ニャー…まあ、アオアシラの討伐クエストではニャいし、このままロイヤルハニーを納品しちゃうニャ」
　報告はその時ニャ…と続けてエリアを出ると、人影が見えたニャ。

　旦那さんとロアルドロスのたてがみをぼっこぼこにする時よく訪れるエリア７の湖面に一人が座り、一人がその後ろに膝立ちにって…ハニャ？
「旦那さんとセンセイニャ」
　ハクサイが息を潜めて呟き、またもパニックを起こしかけるネルをシルビアが押しとどめる。危なかったのニャ。
「何もこんなトコでやらんでも…」
「焦げた髪してるせんせーは持った覚えありませんから！」
　あのジンオウガはきっと二人が狩ったヤツなんだニャ…やっぱり

ボクらのクエストは受付嬢さんのミスってやつかニャ。
しかし、何をしてるんニャろ？
「首まで剥ぎ取らないでくれますか…」
「人聞きの悪い事言わないでくれる!?」
「狩りより怖えよ…」
「ウルにぃ…もう、焦げた髪のかっこ悪いの、嫌って言ってるでしょ……」
剥ぎ取りニャイフかニャ、小さい刃物で旦那さんが、旦那さんのセンセイの髪を削ぐように切っていたのニャ。
二人の会話を盗み聞きするに、ジンオウガに焦がされたらしいニャ。
「あの二人は、番いにならニャイのかニャー…」
ぽつりと零すネル。まあ、最近の旦那さんを見てればそう言いたくもなるだろうニャ…
「うちの旦那さん、お父さんがハンターだったのニャ」
ボクはちょっとだけ、ボクと旦那さん…シアちゃんの秘密を独り言で呟く事にしたニャ。
ーーお伽話じゃ、よくある話。
狩りで名を馳せた父を持って、貴族に重用されて、何不自由なく暮らしていた娘が、顔も見た事のない婚約者と結婚させられそうになって。
返事を先延ばしにしたら、父に古龍討伐の依頼が舞い込んで。
撃退こそしたものの、凍傷で手当が遅れ、脚を無くした父は引退を余儀なくされ…間を置かずして病に伏せて、すぐに亡くなってしまった。
「女の子が12の歳の話ニャ」
丁度、好奇心旺盛な娘は父に着いて、比較的安全な古代林へ行ってはゼンマイを採ったり、リモセトスに果実を齧らせては驚かせて横取りしたり、それはお転婆だった。
父が亡くなり、目に見えて意気消沈した娘に、しつこく貴族が言い寄る。優秀なハンターの娘にかける情けではない、後ろ盾を失くしな

す術の無い娘を飼い殺しにしようと躍起な様だった。
　見かねた父の知己が進言したものの、彼もハンター稼業を営んでいたお陰で、遙か北の雪国へ轟竜の警戒という名目で追い払われてしまった。
「女の子は16になる前の日、家を飛び出したのニャ。結婚…番いになれる歳になったら、何をされるか分からニャい。雪国のハンターさんを頼って、逃げ出した先で色々な仕事をしてみたけど、性に合わなかったみたいだニャ。まさかお父様と同じハンターになるとは思わなかったニャ」
　あの胸糞悪いニヤケ顔の貴族、今頃何してるんニャろ。一度引っ掻いてやれば良かったニャー。
「あれ？　お母さんは…」
「いないのニャ。ボクがキッチンアイルーとして雇われた頃には、亡くなっていたニャね」
　だから、ボクはずっと見て来たのニャ。
　初めまして、ボクを撫でて喉を触ってゴロゴロさせて喜んでた日。
　お父様がクシャルダオラに発った日。
　風は凪いだのに、シアちゃんの涙が止まらなかった、お葬式の日。

　ずっと二人で計画してきて、とうとうお屋敷から抜けだした日。
　シアちゃんにご飯を作りながら、初めてのクエストに送り出した日。
　イャンクックを初めて狩れた日は、こっそり持ち出してきた怪鳥のカワ焼きが美味しかったのニャ。
「だから、シアちゃ…旦那さんは男の人が苦手なのニャ。慣れたのが女の子扱いしないウルさんと、エルドさんニャし、嫌ではないけどニャ…」
「分かりますニャア、うちの旦那さんが、もっと優しかったらニャア…」
　シルビアのせいじゃないニャ、肩を落とさないでニャ…

……まあ、ボクはシアちゃんが笑っててくれたら満足なんだけどニャ。

ー

ーー

ーーー

首筋が少し寒い。

そりゃあ剥ぎ取りナイフじゃ、限界があるわな…

「何よ、私は似合ってると思いますけど」

「いやーでも、もうナイフ仕舞って下さい後ろだけで十分です」

「むー！　良いもん！」

シアが鏡代わりにしようとしていた水面を、屈んで覗き込む。襟足が大分短くなり、纏めて前髪も削がれそうだったが全力でお断りした。ちょっと目元に掛かる前髪は、このままでいーや。

左側で髪を括っていたせいか少し此方だけ長いが、他ならぬシアの所業である、許してやろう。

「髪の毛払うから、まだ立たないで」

「ん」

シアとは身長が頭一つ半くらい違うので、たまに素直に言う事を聞いてやる。おれが無駄にでかいとシアは言うが、背が高いと色々便利なんだ、大型モンスターの頭も多少届きやすいし、小娘の頭押さえつけたり旋毛グリグリしたりとかに。

掌で簡単に、破れたベルダー装備の肩布で覆った首元を払い、シアは布を除ける。項に入り込んだ髪が無いか払いながら確認しているようだ。

「んッ……」

微かな、指よりも柔らかい感触…どうやら、悪戯娘がいるらしい。

おれが手を伸ばそうとすると、耳元でシアが囁く。

「ウルにぃ、あんまり私を

「ニャーっ!!」
「コラ、押すニャッて！」
「やっちゃったニャア…」
バサバサ、ドサッ。とアイルーがエリア端から2匹転げて来て、その後ろにこれまた2匹覗いている。
「リンちゃん、ハクサイ…な、何してんのあんた達…！」
「ネルが押すから見つかっちゃったニャ！」
「ハワワワ、ゴメンナサイニャーっ！」
猫達はモドリ玉でも使ったのかって位に素早くエリアから消えて行った。
何だったんだ、おい。帰ったら覚えてろよ？
「ま、はい。続きは？」
促したが、シアは困った顔で赤面し失語してしまう。
たまに、こうなんだよな。恥ずかしがり屋なんだか何なんだか。
「ほれ、帰んぞ」
破れた肩布をひょいと肩に掛け、歩き出すと白疾風のポニーテールがすぐに半歩後から着いてくる。
「月が、綺麗だね」
振り向くと、夜空を見上げたシアが微笑んでいた。
口付けるのは止めにする。
…優しく可愛がるのは、どうも苦手だ。

…　ｅｎｄ．

「申し訳ありません、ベルナの受付嬢さんが…ムーファちゃんのぬいぐるみを…！」
「お陰で旦那さんにハンバーグ工場送りにされたニャ！」
「３０回連続でネンチャク草の栽培ニャア！　シルビアの白毛がベッタベタでペイントしたみたいになっちゃったニャア…」
「ほんとにごめんなさいー！」

恋そつもりて

「上位個体のクエストを、ウル殿にお願いしたいのですが」
　最近、ベルナ村の村長より顔を合わせている集会所の受付嬢が、神妙な面持ちで、アイテムボックスの整理をしていたおれに話し掛けてきた。
「昇格試験はねーのか？」
「装備を整えて頂く時間はあると思います。少し今回は特殊でして…先に素材収集を許可します」
「は？」
　よくよく聞き出すと、どうやら人手不足なんだそうだ。最近、人里に現れた上位相当のモンスターの数が多く、多くのハンターが討伐に行っているらしい。そこで、元G級という無駄な肩書のあるおれの実力を見込んで上位エリアを試験無しで解禁する、と。
「ただ、今は紹介出来る狩猟クエストがありませんので、採取や納品クエストを」
「またぁあああ!?」
「ウルさんはいい加減ベルダー一式以外を作りましょう！　だからこんな措置を講じる事になったんですよ！」
「んっだよーおっちゃん年食ったしサクサク狩りてぇよ…」
　ショートカットの受付嬢の後ろから、分厚いリストブックを持ったアイルーが走り出て来て俺に一枚のクエスト依頼書を投げつける。
「け、渓流の素材ツアー？」
「さっさと行けニャー!!」

ー
ーー
ーーー

「最近ご無沙汰だったわね」
「アネットさんこそ、ずっと高難易度のクエストばかりだったみたいですね。暫くぶりです」
「うふふ、相方がアレじゃあねェ…引っ張りだこなのよ」
　のんびりとした口調とは裏腹に、色黒の肌を惜しげも無く晒した荒鉤爪装備を纏った、野性的な風貌のお姉様ーーエルドさんとペアを組んで狩りをしている女性ハンター、アネットさん。
　全武器を一通り扱えるエルドさんとは違い、大剣一筋でどんな狩りにも行ってしまう。ブナハブラの大量発生と、ケルビの角取りが眉間に縦じわが出来る程嫌いで、知り合ってからはたまに頼まれていたんだけど…
　笑ってどんなクエにも対応出来る（そしてそれだけの装備がある…女子かとツッコミを入れる程に）ペアのエルドさんとは逆に、苦手があって人間らしくて好きだ。
　いや、エルドさんが嫌いとかではなくてね！　凄過ぎだし、私がダメダメだから、尊敬するしかなくて。
「でね！　この間のアイツったら酷いのよー、私にイャンガルルガの尻尾切断頼んでおきながら双剣で斬り込んで自分で斬っちゃうワケ！」
「ま、まあ動きながらだし、突進斬りしますしね…」
「それはいーのよぉ！　クエ後に『あれ、頼んだっけ？　スマンつい斬れそうで』とか言って！　戦バカ過ぎでしょー」
　まあ、後一撃で斬れるトコだったし、良いけどねェ…とアネットさん、綺麗な長い髪を括りもせず流して、フラヒヤビールのジョッキをダンッ！とテーブルに…わ、割れそう…
「シアちゃんはどう？」
「え？」
「思い人とは上手く行ってるの？」
　私はさも、片思い中の乙女の様に振る舞いはぐらかす。
　思い人…好きな人、と言ったらウルの事になるんだろう。でも恋人という存在ではない、もっともっと大きくて、無くしたくない私の居

場所だから。
だから、私はむしろウルの所有物でいいくらいに思っている。あまり人には言えないけれど。
「ウソつきねェ」
野生の獣めいた、笑顔の中の鋭い瞳と視線が合った。
「シアちゃん、変わったもの。お姉さんの目は誤魔化せないわよー？」

対面していた筈なのに、アネットさんはテーブルから立ち上がり、私の隣に座り直す。そして、優しく語りかけてくる。思わず顔を伏せてしまう。
やめて、私、我慢できるもん。
今のままで構わない、ウルの隣に居られれば
「ご飯が食べられないオバカさんは、狩りでも活躍できないわよー？

あなた少し、恋煩いしてるには痩せすぎね」
優しく、頭を撫でられる。掌が温かくて、何故か視界がぼやけてくる。
ウルと違う、遠慮のない癖にこちらを気遣っている踏み込み方だなぁ。こんな撫でられ方、なんだか
「お母さんみたい」
くすっと笑っただけなのに、可笑しいくらいに涙が溢れる。本当に、私の目から出たのかなってくらい。
「ウルの前でしか、泣いた事無かったのになぁ」
「あら、お母さんじゃなくて『お姉さん』って呼んでくれるなら、幾らでも良いわよー？」
私、貴女を産むには随分と若いつもりだし♪と悪戯っぽくウインクをして、アネットさんがハンカチを差し出した。
私は少しずつ話した。
母が亡くなり、父も怪我が元で亡くなった事。居場所を無くし家から逃げ出した事。ポッケ村の父の友人を頼り、結局ハンターになった事。

ーーウルに出逢った時の事。

ー

ーー

ーーー

「クエストボード見えねえのか？」

それが、振り向いた彼の第一声だった。

私はけして背が低い方ではないが、彼は結構な長身で、声の元を辿ろうとした私は彼のディアブロス亜種の防具の肩くらいを見、ちょっと見上げなくては顔まで見えず驚いたのをよく覚えている。

中からのざわつきとは裏腹に、珍しく閑散としたクエストカウンターで、私が後ろからボードを覗き込もうとしていたのに気付き、彼は半身分くらい横に避けてくれたのだ。しかし私のハンターランクでは受注出来るクエストが無いようで。うーんと唸って踵を返すと、声を掛けられた。

「おれ、素材ツアーなんだけど、行く？」

「え？」

「下位クエスト無かったんだろ？」

何で分かったんですかと聞いたら、んなパピメル一式、下位ハンターちゃんだろうがと言われる。私が少しムッとしたのを察したのか、他に何かやりたかったのかと逆に聞き返された。

「もうすぐ、上位昇格試験なので。アイテムの材料補充に」

当時の私の得物は太刀、ヒドゥンサーベル。あまりディアブロスやティガレックスといった大型は得意ではないが、迅竜ナルガクルガは防具のスキル相性がいいのか比較的楽に狩れるモンスターである。炎への耐性が低いが、防具も一式揃えてはいる。今日は、たまたま採取目当てでパピメルなだけなんだけどね。

「ふーん、付き合ってやろか？」

「え？」

「試験、一人じゃきついんじゃないのか。アドバイスまでいかねーけ

ど、くれてやったりできるし」
　初対面の男性にかなりフランクに接せられ、私は混乱し通し。あまり良くない思い出があり、男性が少し苦手なのだ。
　有難うございます、と言ったところで、しかしなぁと彼は続けた。
「きっとお前さんに依頼されっかな。ティガレックスが雪山で二回、それぞれ別個体が確認されたらしい、撃退もしくは捕獲、討伐ってとこだろう」
「まさか、試験がそれだって言うんですか」
「二頭は無理だろ、今ギルドでも協議しているらしいな。受付嬢が零してたぞ」
　このハンターさんはギルドの関係者か何かなんだろうかと疑いだした時、まさしく下位クエストを扱っている受付嬢さんが慌ただしく奥から駆けて来て、私の名を呼んだ。
「上位昇格試験なのですが…早急にお願いしたく！
　雪山に現れたティガレックスが、村に接近してきています！　ブランゴ狩りに出ていたハンターさんがどうにか雪山に押し留めてくれていますが、時間の問題です。撃退または、一頭だけでも討伐をと…！」
　苦手なティガレックス。一頭だけでもと言われたが、二頭狩れたら上位昇格は間違いない。
　行けるのか？　いや、行くしかない。断れる訳がない…
「同行しても良いんだろう？」
　頭の上から声がする。
「も、勿論！　上位ハンターのウルさんがご一緒でしたら二頭討伐は間違いないですね！」
「こっちの姉ちゃんの昇格も問題ねえし、村も守れて一石二鳥だな」
　私を置いてけぼりにして、話が進んでいく。
　でも、心強い味方なのだ…きっと。
「ほれ、一張羅あんなら着替えてこいよ」
「は、はいっ！」

私は自宅へと踵を返して走り出す。
普通に笑っているのか含み笑いなのか判断しがたい、目尻の垂れた彼ーーそれがウルとの出逢いだった。

ー
ーー
ーーー

確かに、二頭のティガレックスは発見された。先遣というか、足止めをしてくれていたハンターさんのお陰で一頭は竜の巣、もう一頭は雪山の頂上と良いタイミング。
一先ず分断して戦おうという私の意見を却下し、ウルは私を連れて雪山エリア3の巣の個体に向かう。
集会所にいたままのディアブロス亜種の防具一式に、ブラックテンペストというランスを担いでいる。厳しいのは見た目だけで、言動はかなり軽めなのが何とも言えない…のだが、狩りの腕は本物だった。

ランスという機動力に欠ける武器を、軽やかに使う。ガードに余り頼らないタイプのようで、器用にティガレックスの噛みつきや氷塊投げをステップでかわし、時にはカウンター突きで接近し怯んだ頭に連撃を入れる。三撃目後に隙がある為ほぼ毎回ステップを入れているのだが、彼の定点攻撃中、派手に足元に雪が舞う事はなかった。ほぼ同じ場所から動かず、まるでティガレックスが攻撃に吸い寄せられるように。
狭い氷室の竜の巣を走り回るティガレックスにも厭わず、必要な所でガードを入れつつカウンター突き。また同じ事の繰り返し。
そんなものを邪魔する訳にも行かず、私は後ろ脚に貼り付き、鬼刃斬りを繰り返し太刀の刃を鋭いものにしていく。尻尾が斬れた瞬間、ティガレックスが大きく前に吹っ飛び、彼が初めてずっこける事になる。
やばい、と思った時には彼は雪上に転がりつつ「ないすかー」と言っ

てくれていた。
　不幸中の幸い、頭を傷つけられ尻尾をもがれたティガレックスはすぐに斃れ伏す。
「頭貼り付き楽しくて、離脱遅れちまった」
「すみません、まさかあんなに吹っ飛ぶとはっ……！」
「いーよ、でも尻尾斬れるのギリギリだったぜ。もーちょい被弾減らして頑張りな」
　確かに的を射ている。ので、素直にはい、と返事をする。
「良い子だ…おっしゃトカゲもう一匹やっちまうぞ」
　今度は試験らしくお前さんが頑張れよー、とナルガヘルムな私の頭をぽんぽんっ、と撫でる。
　言い知れぬ、充足感、安心感、安堵感。なんて表現出来ない、掌の温かさなんだろう。
　ああ、このひとは、大丈夫だ。
「ウルにぃ、待って！」
　先に走り出していた彼の背中を追う。
　初めて会った人に『ウルにぃ』だなんて、自分じゃ考えられない事だけど、勝手に口から滑り出ていた。
　彼は驚いて振り向き、変な顔でーーいや、本当に変な顔だった、片眉を上げて目は見開いて…驚いたにも程があるーー耳に手を当て首を傾げた。
　思わず笑ってしまう私を、彼はわざわざ戻って来て抱き上げ（というには色気がない、脇に手を入れ持ち上げ）、雪の積もって山になった部分に向かって放り投げた。
「ぶはっ！　ちょ、ウルにぃっ！」
「だから、そのにぃってのは何なんだ？」
「じゃあ師匠？」
「んな良いもんじゃねえ」
「…じゃあウルにぃ」
「戻ってますが！」
「ウルにぃ、早く行こ」

雪を払って、山頂に向けて走り出す。後から何やらブツクサ言いながら、彼も着いてくる。
ーー当然、日暮れ前にティガレックス二頭の討伐は完了した。

ー
ーー
ーーー

「結構長い付き合いなのねェ」
「そうですね、その頃はまだ私も２０の歳になってませんでしたし」
「先にマークスづてで貴女と知り合ったものねェ…一緒に狩りしてても可笑しくないのに」
で、とアネットさんが続ける。
「これからどうしたいの？
その様子じゃ、好きも嫌いもはっきり伝えてないんでしょぉ？」
ほんとは好きって言ってしまってるけど、まさか本気にしてるかなー…
「これから、ですか」
「別にぃ、明るい家族計画しなさいなんて言ってないのよー。痩せるほど悩むくらい、自分の気持ちと現状に齟齬があるワケでしょ？」
ちょっとぶっとんだ言い方に、くすりと笑いが漏れたが、後から続いた言葉は確かに私の心を揺らした。
黙った私に、アネットさんはフラヒヤビールのお代わりを給仕アイルーに頼み、残りを飲み干しジョッキを静かに置いた。
「マークスと色々あった後から、こっちに顔出さなくなったもんねェ…アイツ、血祭りに上げてやらなきゃ。いつがいい？」
「いやいやいや！　それは、え、遠慮しますっ」
そーお？　うふふ、やりたくなったらいつでも♪と言いながら、釣り目の野性的なお姉様は先を促してくる。ちょっと怖い。
「ウルにぃと、ずっと一緒にいたいです。できたら、私を好きになってほしい。便利なアイテムとして連れ回してくれるなら、それでも良い

んですけど」
「後半だけ却下で♪」
「なっ！　何でですか、素直に話したのに」
「だって、好ましくなければそんなに長くペア組まないわよー。貴女の話だけ聞いてても、嫌な事は上手く立ちまわって避けるタイプでしょ、駐在ハンターなんて絶対嫌がるわよ」
　それもそうなんだけど…彼は意外と優しくて面倒見がいいから分からない。だいたい、
「好きなんて、言われた事無いです」
「ふーん。じゃあ、貴女が彼にされて嬉しい事って何？」
　すぐ浮かぶに決まってる、悔しい事に全てのきっかけだから。
「良い子だ、って言われて頭を撫でてくれること…？」
　我ながら子どもじみていて、恥ずかしく後半は消え入りそうな声になってしまう。
　ぷっ、とアネットさんも吹き出した。ほら、言わなきゃ良かった…

「シアちゃん、カワイイわねェ…」
「いいえ、可愛かったらとっくに大事にされてます」
「いや…だって、分かってやってるわよー、それ」
　アネットさんは、にやにやしながら、もう半分近く減ったジョッキに口をつける。
「ワルイ男に捕まったのねェ」
　不意に、アネットさんがウインクした。私の後ろを見ていたようで、視線を追ってみるとエルドさんだった。
　激昂ラージャンのものと思しき腕装備を挟んで、火竜リオレウスと天廻龍シャガルマガラの防具と、もう一目見て何か凄い人来た！という雰囲気になっている。武器は初めて見る、弓だ。
　彼は迷わずアネットさんの隣に腰掛け、メニューを引き寄せながら言った。
「テオ弓作ったから、何か飯食って狩りに行くぞ！」
「…相変わらず、新しい装備作るの好きねェ」

「アネットも大剣以外やれば良いのだ、毎日新鮮で良いぞ！」
ふはは、と何処かの教官を思い出す豪快な笑い方のエルドさんが、そうだと膝を叩いて私に向き直った。
「シアの白疾風一式、強化がまだだったろう。よし行こう！」
「え、や、嬉しいんですけど、今日は武器以外何も持ってきてなくて…」
「アイテム持ち込み不可という条件のクエストがある、丁度そこからの筈だ」
あれよあれよという間に、三人でクエストに行く事になってしまった。
ウルにぃ、朝出掛けたっきりだなぁ…まあ、少しくらい留守しても、大丈夫だよね？

ー
ーー
ーーー

漸く、渓流から一番近いユクモ村だ。
久々に丸一日渓流に居たぜ…特産キノコ集め以来か。アプトノス車に揺られ、夜に出発したのがもう日の出。一応目は瞑ったものの、木のガタゴト言うアプトノス車の寝心地が良い筈もなく、非常に眠い。
そういや、これ、といったものを集める時、何故か引っ掛かる素材ってものがある。物欲センサーなんて言い方をする奴もいるようだが、今日はまさしくそれが発動したらしい。
乱入してきたロアルドロスと喧嘩してたアオアシラにはビビったけどな。
「ガーグァ、絶滅すんな…」
タル配便から届いた素材ツアーの荷物をほどき、確かに数が足りているか確認する。丸鳥の羽！　これ、テストに出んぞ。
集会所に隣接した加工屋へ急ぎ、目的のものを依頼する。出発前に

目星を付けて、手元にある材料だけ預けておいたので、加工屋も頷いて奥で待っててくれと促してくれた。採寸を済ませて、寝て待つ事にする。
流石に朝一番に出掛けるハンター達が出て来たのか、話し声がしてきたが構わず睡魔は襲ってくるのだった。
「…ってこ……とで…」
「……に、よ…くね」
「はい、有難うございました、また！」
一際でけー声。我ながら変な言い方だが、何だかよく頭に通ってくる声だ。
「あ、ウルにぃ」
なんだ、シアか。
ちょっとこっち来い、ねみい。
「ウルにぃ、装備つくるの？　私も白疾風の強化なんだよー…わっ!?」
シアが、ボロいベルダー装備を着たままのおれを見て察したのか、嬉しそうに近寄ってくる。そのまま捕まえて、驚いている小娘の胸元に顔を埋め、また寝転がるとする。
やっぱあったけえな、こいつ。
「ウルにぃっ…」
ちっとこうして抱かれてろ、抱き枕シア。てか、防具強化か、インナーに毛布ぐるぐる巻きってどんな格好だよ。素直に着るこいつもこいつだが、加工屋ももっとなんか、なあ…
「ウル…ずるいよ、私がウルの事しか考えられないの、知ってる癖に」
んなもん、年単位でご存知ですとも。おれも、お前が可愛いからな。
夢現に色々問い掛けられるのが鬱陶しくなって、五月蝿い唇を抓んで少し力を入れる。
「好きじゃなきゃ、んなとこにキスなんかしねえ。少なくともおれはな」

静かになったので、今度は遠慮なく胡座の中に座らせて、肩に額を預けて寄り掛かる。やっと眠れるぜ…

「ずるいよ、ばかウル」

目が覚めたら、新しい防具の出来上がりだ。

ｅｎｄ…

たまの緒よ

何度も、何度も名前を呼ばれる。
何処からなのかもう分からない外傷と出血が、おれの思考を真っ赤に染めていく。
漸く動いた右手が軋みながら、頻りにおれを呼んでいるやつの頭を撫でる事に成功した。
「ウル、もう秘薬ないよ…ね、どうしよ…」
「早く、行け」
シアの白い頬に、俺の血がべっとりと付着する。雪の中に咲く椿みてー。
柄にもなく綺麗だと呟いたら、バカと罵られた。
「わたしには、ウルしかいないんだから」
地響きと共に、血の臭いを嗅ぎ付けたのか奴がエリアに入ってきた。何とか逃れた筈だったのだが、そう上手くいかないもんだな。
シアが立ち上がり、デスパライズを構える。こら、お前さんの手に負える相手じゃなかろうに、馬鹿が。
先程のディノバルドより厳しく突き出た角の下の眼窩から、怒りが感じられる。巨体がこちらを睨み、振り上げられた尻尾がシアを襲う。
その前に、おれは飛び出していた。ジャストタイミングでの回避、もう限界を超えたであろうおれの身体は、渾身の溜め攻撃を奴の頭にかち込み、怯んだ奴の頭突きをハンマーーー狐槌ツキヲイザナイーーーの柄で受け止めた。
だが虚しくそれも、みしり、と亀裂が走り、おれの意識もそこで途切れてしまった。
ー
ーー
ーーー

おれ達は確かに、上位昇格対象のディノバルド討伐クエストに来た筈だった。
ネックだった防御面も、ユクモノ・天シリーズを作成し、強化は完了してないものの体制は万全。流石に初見と、シアに仕事をさせてしまい二度麻痺を取らせたが、足を引き摺り休眠に向かうディノバルドを追ってエリアに進入する。そこであの個体に出遭ってしまった。

「なに、あれ…」
息を呑むシア、答えないおれ。
先程まで割と真面目に戦っていたディノバルドが、奴自身のものと似た尻尾に払われ断末魔の悲鳴を上げる。
「乱入か、ちっと面倒な事になったな」
倒れ伏すディノバルド、それを踏み付け雄叫びを上げる、炎を飲み込んだ様な赤黒い体色、遥かに大きく鋭利な尾、大きく発達した頭角…亜種かと見まごう姿に思わず怯む。
すかさず上がる、古代林中に響き渡るかのような咆哮。
動けないおれ達を襲ったのは、断頭台の如き尻尾の断罪だった。
いつだったか狩った砕竜ブラキディオスに似た爆発が、それだけで非常に痛い大木のような尻尾の一撃から起こる。
ブシドーなもんで、初撃はすり抜けたものの、溜めながら振り上げたハンマーは虚しく空を打った。
「な、に」
口を開いた刹那、上空から、またあの尻尾が降ってくる。
回避はぎりぎり間に合ったが、ユクモノカサの端がざっくりと削がれてしまった。
「ウルにぃ、一旦逃げよう!」
閃光玉を握り締め、シアが叫んだ。盾を構えながら、自分の方を向いた瞬間宙へ投げると、相手が目を眩ませて無闇矢鱈に辺りを攻撃しだす。
牙で研いだ尻尾が、辺りの雑木を薙ぎ倒し、尻尾が纏った何かが火

花を散らした。
「ありゃ何だ、流石に今の装備じゃ手に負えねーな」
「ムリムリ！　あんなの見た事ない！」
腐っても白疾風装備一式を着ているシアが、見た事がないと言うモンスター。そのリスクを理解出来ない程、おれも馬鹿じゃねー。
と考えた所で、エリア端にまで走ってベースキャンプへの道をひた走る筈だったシアが、悲鳴もなく跳ね飛ばされた。もう閃光切れたのかよ、クソっ！
「やば、早いっ！」
「不意打ち頭突き、威力も違いますってか?!」
おれ達の間を断つように、バカでかい尻尾がまた叩き付けられる。

仕方ねえ、シアだけでも逃がすか…
おれは緊急事態発生時やクエストリタイアの際に使う、手投げの信号弾を後ろ手にシアに投げ渡す。
「任した！」
「え、ウルにい?」
狼狽するシアを突き飛ばす。慌てふためきながら小娘が、信号弾を握りしめたまま茂みの中へ消える。
当然、一人減ったもんで相手の標的がおれに変わった。揺らめく大剣のような巨大な尻尾が、何故か常に熱を放つ…
さっき戦ったディノバルドとは、危険度が違えな。
「オラァっ！」
武器出しからのかち上げ、横振り、縦振りからのアッパーのお決まりコンボを、威嚇してきた奴に決めてやる。何だ、案外普通のディノバルドと変わんねーのか?
そう思ったのは最初だけだった。聞いてねーぞ、こんなの…。
近くで破裂音がし、空に真っ赤な煙が上がる。無事、シアが信号弾を使ったようだ。
おれも後退させてもらおう。
鼻面にペイントボールを投げつけ、シアを突き飛ばした方へ移動を

試みる。
だがその希望は儚くも露と消えた。
「ぐぁっ！　なんだ、これっ！」
牙を研ぐ動作をしていた筈の奴が、口に溜めた炎のエネルギーを、マグマ迸る火山のように吐き出す。
ブレスなんかリオ夫婦だので慣れっこの筈なのに、避けたと思ったら3連ブレスかよ！
まずい、ダメージもかなりのもんだな。口内に炎を溜める動作、ありゃ厄介だ。
「ネコでも連れて来りゃ良かったか…」
舌打ちをし、おれはハンマーを構える。奴は炎を口に蓄え、また尻尾を砥ぎ上げる。この動作がきっと隙だな…
駆け寄り、頭をブン殴ってアッパー叩き込んでやる。
突如、奴は小さく悲鳴を上げのたうち回りながら倒れた。頭が弱点なのはどのモンスターも当然だろうが、いきなりだな。結構殴ってた筈なんだが…
奴の倒れた位置で、きらりと何かが光った。
「ウルにぃ！　大変！」
「何だお前、キャンプにいろって…」
「ネコタクが来ないの！」
逃がした筈のシアが走ってきた。エリアに入るや否やもがいている奴の姿に驚きつつ、俺の所へ近づいて来る。
クエストにおいて、ハンターが狩りを続行できない怪我を負うと、何処からともなく手押し車でアイルーがやってきて、ベースキャンプへ送っていく。これが通称ネコタク。
で、一回毎に彼等に報奨金の三分の一を支払う為、一回のクエストで怪我を負い離脱するーー所謂、乙るってやつだーーのは基本的に二回まで。三回も乙るようじゃ装備も狩りの腕も見直しって事だな。
やむを得ずリタイアする場合などでもこいつがやって来るのだが…それが来ないってなると…自力で退避か、コイツを狩るしかない。

シアが奴の足元まで走り、素早くシビレ罠を張る。
「時間稼ぎしか出来ねーかもだが、しゃあねえな」
「コイツのせいでネコタク来れないのかな…」
「知らん！　一先ず死なないよーにやるぞ！」
起き上がり、怒りに燃えるディノバルドみてーな奴は唸ろうとした所でシビレ罠にかかり動きを止める。
罠が効くならやりようがあるってこった。
「はいっ、いちにの、さーん」
縦に三回思い切りハンマーをお見舞いしてやる。続けて力を溜め、アッパー。シビレ罠で体が動かないお陰で、頭への攻撃の振動が、ぐわんぐわんと余計に入るのだろう。スタンさせちまえば、何とか…
「きゃあああ！」
頭に集中していたせいで、シアの動きを見失っていた。罠が解け、すかさず八つ当たりのように飛んできた尻尾の一撃を喰らったようだ。
吹き飛ばされ、攻撃を受けた腕装備が僅かに千切れだし白い肌が見えた。受け身を取り立ち上がろうとするシアの背に、再び爆発する粉塵を纏った尻尾が叩きつけ
「っだらぁぁぁぁあ!!」
相討ち、と言えば聞こえは良い。
粉塵を纏った熱と質量の塊にハンマーにぶつけたが、勢いを削いだそれはそのまま振り下ろされた。
「ウルーッ!!」
「がっ…は」
尻尾にヒビの入った奴は、突然エリアから姿を消した。体力回復か、何かだろうか。
おれはカウンターどころか、どうやら骨の一つもいっちまったらしい。
布地が裂け、溢れる血をハンマーを杖に起き上がり…れなかった。
「ウル、返事して！」

「揺さぶんな、血が出る…」
「もう出てるよ！　秘薬、秘薬…」
駆け寄ってきたシアが、腕を押さえ顔をしかめながらアイテムポーチを探る。
まーた泣いてるな、馬鹿小娘。
「おれも、ヤキが回ったな」
可愛い小娘を庇って負傷たあ、お伽話と違って美談にもなりゃしねえ。
と、ようよう立ち上がりつつ、おれは一人ごちた。

ー
ーー
ーーー

「それが、一応の報告という事ですね」
何やら龍歴院の面々に囲まれ、おれとシアは夫々に頷いた。
おれは出血多量の外傷多数で、治療室に運ばれている。まあ、この面々に囲まれて状況説明って、安静になんかしてらんねえって感じだがな。
…幸いシアはまたもや打ち身と少々の外傷で済んだらしい。ほとほと、悪運の強い奴だよ。
「貴方達が遭遇したのは、間違いなく『燼滅刃』の二つ名を冠するディノバルドでしょう。特徴が記録と一致します」
眼鏡の如何にも秀才っぽい奴が、分厚い本を見ながら説明する。
「決め手はウルさんが持ち帰ったこの粉です。テオ＝テスカトルの粉塵爆発を起こす粉煙と似たもので、燼滅刃の塵粉と呼ばれています」
「落し物拾っといて良かった…」
「ウルにぃ、がめつさもたまには役に立つんだね」
「うるせーぞ、こむす…いでででで…」
受け身を取りきれなかったのが原因か、鎖骨が折れているそうで、

ハンターとして鍛えてはいるものの完治には時間がかかるようだ。

まあ、無茶を二度も繰り返せばそうなるわな。

「その記録、わしが行った時のやつだな」

秀才の持つ本を覗き込み、エルドが呟く。はい、と頷き秀才が本を閉じた。

「燼滅刃は勿論の事、古代林は最近漸く調査が進んできたばかりです。これではまた生態系が崩れ、積み重ねたデータや調査もやり直しに…」

「データ云々は置いとき、村や今回のようなハンターへの被害もあるだろうよ。わしはそれが心配だな」

「珍しく、狩る狩る言わないのねェ」

「当たり前だ、わしとてまだ一度、討伐に成功しただけだ。ウル程の実力者がこれとは、相手の力量もかなりのもんだ。わしらの準備も必要だろう？」

なんでこの場にエルドとその連れがいるのかというと、単純に古代林調査の協力をしていた所を、おれ達を見つけた彼等が連れ帰ってくれた…という訳だ。

連れはティガレックス防具に似た、露出の高い装備の女で、アネットと名乗った。こいつも只者じゃねえな、こりゃ。シアから聞きかじった荒鉤爪ティガレックスってやつの装備じゃねえのか？

ネコタクの手配も、どうやら燼滅刃とやらがアイルー達の通り道を崩してしまい身動き取れなくなっていたのが原因らしい。

「過大評価です。おれなんざ、やっと上位に上がったばっかで」

「いや、それはシアを庇っての怪我だと聞いているぞ。そしてあの落し物だが、怒った燼滅刃の頭か尻尾に大きなダメージを入れると怯んで落とすものと、わしは考えている。初見で生半可なハンターが出来る事ではない…と、思うがどうかね？」

「ま、昔は無駄にギルドカードが輝いてましたがね。今はやーっとユクモ天一式の隠居ですよ」

エルドは黙っておれが話し終えるのを、後頭部をかきながら、目線

を外して待っていた。
「わし、この燼滅刃を捕獲したいんだわ。隠居なんて言わずに協力してくれんか？」
「へ？」
おれの口から出たのは、間抜けな空気漏れのような音。いや、まあねえ、驚くなという方が。
エルドは続けて、あの落とし物が燼滅刃とされる個体しか落とさない事や、多くの通常種のディノバルドとの異なる行動を見極めたい事などを挙げ連ねた。
「研究者みてーだなぁ、あんた」
「何を言います、エルド氏はれっきとした研究者なのです！」
「や、わしそっちは引退しとるし」
「いえいえ、この龍歴院でハンターを兼任しながら多くのモンスターの生体を……」
秀才メガネが内輪で盛り上がり始めたのを、おれは呼びかけで制す。
「おれ、怪我人なんだが。治るまで燼滅刃とやらは待ってくれるのかね？」
エルドはすぐに、ニヤリと笑って答えた。
「おう、わしが痛めつけておいたから、古代林にゃあもう居ない筈さね」
「…やっぱあんた、バケモノだわ」
おれはつい肩を竦め、走る鎖骨の痛みに顔をしかめた。
ま、こーゆー狩り馬鹿も、おもしれーな。
突如バタバタと足音がして、見知った顔が駆け込んで来た。マークスだ。
シアがほんの僅か、身体を震わせた。
「おーい！　古代林で死体が見つかったって噂でもちきりだぞ！」
「知らん、言いたいように言わせとけ。おれは取り敢えず生きてるし」
「久々に会ったと思ったら、まだユクモなんて着てるのかよ、そりゃ二

つ名ディノバルドにぶっ飛ばされるわ」
マークスは、シアと出会う前からの付き合いの狩り仲間ではある。結構ミーハーで、新しいモンスターやアイテムの情報を仕入れにあちこち飛び回ってるので、情報屋として重宝している奴だ。
最近は新しくスラッシュアックスを使っているようで、白疾風装備にセルレギオス素材らしきスラッシュアックスを背負っていた。
「おうマークス、不慮の事故だからそんなに責めてやるな。燼滅刃はわしとて一回しか遭った事が無い、言わばほぼ未知のモンスターなんだわ」
「いやー、得物変えたら被弾増えたんすわコイツ。ランサーだったんすよ！
遂にこんな大怪我したか、大人しくハンマー置けよ」
「ねえ、やめて」
こいつ、空気読む奴だったんだけどなー。エルドへの答えはともかく、シアが言葉少なに止めてるのも聞こえてないな。
「おれが死体扱いされるのは別に…」
「ウルは、私を庇ったの！」
ベッドの脇にずっと座っていたシアが立ち上がった。下を向いて握り拳を作っている。
「私の装備でも、一撃で乙りそうな攻撃、受け止めてくれたんだから…っ！」
正面切って言えないんだな、こいつめ。俯いて、絞り出すように言い切る。
「だって、コイツの昇級クエストだったんだろ？　シアちゃんがついてく事なんて…」
「私が無理矢理ついて行ったの！　だからウルは悪くない！」
握り拳が、どんどんきつくなっていく。爪の痕が付きそうだな、止めさせねーと。
おれが痛む身体に鞭打ち、シアの震える拳に手を重ねようとした時、同時にぱん！と音がした。
「怪我人の前よ、傷に響くデカい声はー、禁止ぃ」

続くのは、特徴的な間延びした語調。それまであまり話さなかったアネットが、合わせた手を打って場を鎮めたのが分かり、おれはほんの僅かシアの拳に自分の指先を触れさせるだけにする。
すぐ察したシアが、はっと顔を上げる。緊張が緩んだなら結構、こんなアホに怒ってたら身が持たねえぞ。
「マークス、見舞いの台詞にはちょっとキツいんじゃなぁい？
起きた事をグダグダ言うのは誰でも出来るのよ。女の子庇った傷なんて男の勲章よー？」
「でっ、でも…」
「シアちゃんに『嫌い！』って言われる前に私が追い出しちゃおうかー？　うふふ」
「…す、すまない」
私じゃなくて、ウルにでしょぉー？と続けるアネット。こちらに背を向けているが、きっと目が笑ってないのは丸分かりで面白い。
ま、自分がされたくはねーけどな。
「シアちゃんも、強化終わってない防具とか、色々とやらなきゃね」
くるりと癖の無い長い髪を靡かせて振り返り、アネットが言う。素直に首肯するシア。もうこの空間を支配しているのは彼女だ、おっとりした雰囲気なのに、ひと癖もふた癖も有りやがるな。
「因みにウルさん、大人しくして、戦闘さえ考えなければ１０日位で普通に動けますよ。鎖骨は固定する装具がはめられませんから、無理すると長引きますが」
「あら良かったわねェ！　ウルも燼滅刃対策に装備を練らなくちゃ」

エルドと話していたはずの秀才がにこやかにそう報告してきやがる。何だか乗せられている気がする。
でも白疾風ナルガクルガは行きてーなぁ、マークスとペアルックは心からお断りだが、ちっと武器が欲しい。
「強走薬グレート作らないとな」
「ポンデ？　ゲリョス？　早く治して行くぞーわしも欲しい…」
「エルドさんが行くと、怖がって出てこないんじゃないですか？」

何だとー！　と鋭く反応したエルドに、一気に空気が和んだ。
ま、アホのマークスは置いとき、これから楽しくなりそうだな。

ｅｎｄ…

身のいたづらに

負傷から丁度3日目の夜。
「ウルにぃ、もう身体拭いてあげなくていいの？」
「ああ、強いて言えば背中くらいか」
シアの持ってきた食事を摂りながら、そんな会話をする。
我ながらそう若いと胸を張っては言えない歳に足を踏み入れたのだが、ハンターってのはやはり身体が丈夫になっていくもんだ。ちょっと常人には絶句されるレベルではあるが。
実はおれ、先日鎖骨骨折なんつー怪我を負ってしまい、こうしてシアが家に通って来てくれている。
こいつを庇ったとはいえ、滅多な事ではしない大怪我になり「看病する！」と譲らなかったのだ。
急所は死守したものの、片腕だけで届かない背中やらだけで良いと言うのも聞かず全身を熱いタオルで拭き上げられ、毎日本人かアイルーが飯を届けに来るっつー、いたれりつくせりな…
ま、何かしてないといっぱいいっぱいになっちまうんだろうなー。脳ミソの容量もさる事ながら、メンタルもあまり強くない娘なので。
「後は、何かして欲しい事はない？」
「んー、そろっとシモの事情がよろしくないくらいで、後は別に大丈夫だな」
しも…っ、とわざわざ復唱して真っ赤になるシア。恥ずかしいなら言わなくて良いのにな。
ま、からかっただけの事ですが。
「あ、あのね、ウルにぃ」
先程とは一転、いつになく真面目な顔で、シアがおれの目を見つめて切り出した。
「ウルにぃは、私の事…どう思ってるの？」
お、直球。さて、これをどうあしらうかが年長者の腕の見せ所だぜ。

シアがおれの事をひじょーーーに特別に思っているのは、本人が思っている以上に周知の事実だ。おれがそれに誠実に応えないだけで。
「スタンのタイミングしっかり読まないとデスパライズの麻痺も活きないし、自分で麻痺のタイミング調節出来る様にならんとアカンぞ」
「う、はい…て、そうじゃなくて！」
素直に頷いたと思ったら、少し怒ったような顔になり。くるくる変わる表情は嫌いではない。
「私の事、こ……あ、あ、相棒として見てくれたりはしない、かな」
うむ、踏み止まったのは評価しよう。
多分、あいつは昔おれが『面倒くさい女は嫌だ』と言ったのを覚えている。まあマークスやらと一緒に酒を飲んでいた時の話ではあるが、まあ概ね間違いではない。
狩りに出れば、遠方なら暫く会えないのは当たり前。しかもある程度の腕前のハンターなら、依頼の方が待ち構えているものだ。
『会えないのは嫌、怪我されるのも心配、でも凄腕ハンターでいろ、稼げる男であれ』
なーんて、最後には『私と狩りどっちを選ぶわけ？』って来たらまあ、面倒くさい以外の何物でもない。んなもんの存在を気にして生きるなら、毎日ハンマーブン回してた方がマシってもんだ。
…ってな話をした。シアはおれの事というか、自分のこれと思ったものに対してのエピソードや会話を非常によく覚えているので、ほぼ間違いなくこの話を思い出したんだろう。
「ま、ハンターランクに見合った腕前を見せて貰わねーとだな」
シアはおれの言葉にそうだね、頑張らなきゃ。と小さく返し、とっくに食べ終えていた食器を片付けて席を立った。
とても狡い逃げ方だと、自分でも思う。
「クソが」
ぽつりと口をついて出たのは、つまらない悪態だけだった。

シアの両親が既に亡くなっている事は、出逢ってそう日も経たない内に耳にした。
アイルーだけを連れてポッケ村へ知己を頼って来たという事実は、語る者により様々な形に曲解されていて、酷いものには奴隷として買われただの、没落貴族の妾の子だの…
本人も表面上は素知らぬ振りをしているものの、とても他人を気にしているというのが見て取れた。
そんなシアが、今まさに殻を破って顔を出したヒヨコの如く、おれを特別だとインプットしたのだと気付いた時は驚いたもんだ。あいつの上位昇格クエストを手伝った初対面で、いきなり師匠呼ばわりだぜ？
後から男性恐怖症と聞かされた時は三回ぐれー聞き返したもんだ。

あまりに懐いて、おれに付いて回るので「おれは、お前さんの父親じゃねーんだぞ」と言った事すらある。
その時は、さっぱり意味が分からないという風情で「何言ってるの？」と聞き返された。
依存されるという事は。
彼女を思う通りに動かせる。
おれしか見えない操り人形にも出来る。
逆に、助け導く事も出来る。
面白い位に、シアは純粋で、従順だった。面付き合わせていく内、シアを産まれたばかりのヒヨコじゃなく、縋るものもなく漂泊し、襤褸布のように傷ついた渡り鳥のようだと感じるようになっていった。
おれはあいつを飛び立たせてやらねばと、友人のマークスに押し付けたのだ。
認めよう。

おれは、あいつの全てを受け止めてやるのが怖かったんだ。

―

―

―

後片付けを終えたシアが、慌てて寝室にやって来た。
ちっとばかし惨めな考え事をしていたもんで、こっそり引き上げたんだが、流石に姿が見えないと気付いたんだろう。
「ウルにぃ、体拭かないで布団入っちゃ駄目だよ」
「ん」
シアが熱い湯で濡らした温かい布を持ってきていたので、冷えても何だなと背を向けて、骨折した左側の肩を動かさないように静かにインナーの上衣を脱いだ。包帯も解き、痛々しい傷痕も顕になる。包帯の汚れ方から、出血も落ち着いたのが分かる。これなら固定の心配だけで大丈夫だな。
シアがすぐ脇に来て背中を拭い始める。温かく湿った感触が気持ちいいが、やっぱり風呂に入りてえな…浸かる位なら良いだろう、明日はユクモ村まで足を運ぼうか。
「どうした？」
ひとしきり背中と肩口、二の腕、胸元を拭き取ったシアが正面に回り、ベッドに腰掛けたおれに跨る形で座った。そのまま患部に清潔な包帯を巻いていく。
そういう事がしたい時のシアは、口下手な代わりによく行動で表してくる。余程そちらの方が恥ずかしいと思うのだが、感覚で生きているやつの考えはよく分からん。
「ん」
問い掛けに対する解答は、口も開かない吐息のようなお粗末なものだった。僅かに寄った眉、伏し目がちな様子、何を考えている？
口を開こうとした瞬間、無事な方の鎖骨に口付けられた。続けて薄く色づいた唇が開き、何故かおれは鎖骨に噛み付かれる。軽く、何度

も甘噛みされ、終いには痛みを感じる程になり、唇が離れた時には僅かに歯型が残っていた。
「……何がしてーの？」
「う、分かんない」
分かんないって、お前な。
おれが再び口を開こうとすると、噛み付いていた唇がおれのそれに重ねられる。
「好きじゃなきゃ、口にキスしないっていうの、嘘なの？」
おれ、そんなこっ恥ずかしい本当の事、こいつに言っただろうか。

そんな疑問はすぐに晴れた、そうだ、武具屋で寝惚けちまったんだ。ありゃ夢じゃなかった、畜生。
「私、ただずっとウルにぃと一緒に居られれば良いって思ってたの。でも、どんどん欲張りになって、ウルにぃの特別でいたい、一番になりたいって気持ちが大きくなって、えっちして…」
最後で頬を染め、目を逸らして。今度は目が見れなくなったのか、自分が噛み付いていた鎖骨に額を付けて話し出す。唾付かねーのかと一瞬聞きたくなったが、野暮なので止めておく。
「ウルにぃの事、どんどん好きになる自分がいたの。良い子でも、真面目なハンターでも、便利なアイテムでなくても、丸ごとの私で良いんだって思えて。
だから、こんな言い方おかしいけど、ウルにぃの後ろを着いてくんじゃなくて、隣を歩きたい」
ちくり、とマークスに押し付けた時を思い出し胸が痛む。
というか、素直な言葉が非常に刺さる、沁みる。
おれはこんな風に想われて良い人間だろうか。
「だから私、きっとウルの事をまた好きになったの。惚れ直したんだよ」
シアが顔を上げ、首にその唇が触れる。首に回そうとした手が止まり、躊躇いがちに脇腹辺りに下りていき、抱き締められる。
「離れて分かったの。私、ウルにおんぶに抱っこで、ちゃんと自分で立

ててなかった。居てくれるのが当たり前になってて、ウルがそれを受け入れてくれてるのに感謝出来てなかった」
シアの手が、先日ざんばらになって彼女に切られた髪へ伸びた。
「いっぱい迷惑かけて怪我させて、やっと気付いたの、バカでごめんね」
首筋に雫が落ち、濡れた。
その温さの意味を解さぬ訳がなく、おれも痛まぬ右手で彼女の細い腰を更に引き寄せた。
もう、降参。それも全面降伏ってやつだ。

―
――
―――

「っあ、や、まだ…！」
「まだ何？　まだ準備出来てないとは言わせないぜ」
「ひぁっ！　や、優しくしてってば…」
ベッドの上で、おれが足を開いた中へ跪き、腰を高く上げたシアが鳴く。
咥えていたおれ自身に添えた手はそのままに、何度も口付けた唇は快感を表す声を発したまま端に唾液が伝っていた。
可愛い小娘の告白の後は、しっかり求められた側として、シアがイクまで口で奉仕してやった。
おれ側への口淫の間も、ひたすら髪を撫で、背中を指で辿り局部に触れていた所為か、シアの頬は色付き、尻が揺れている。
ベッドのヘッドボードに体を預け、顎にまで伝ったシアの唾液を掬い、先程散々口で可愛がってやった小さめな花芯に塗り付けてやる。そこはとても素直に、咥えさせる前にヘロヘロにさせた、ぬるつく舌の優しい愛撫から一転、ダイレクトにおれの指から快感を引き出されていく。
「あぁあ、ふぁ、あっ！　しょこ、らめぇっ、ウルぅ」

「お前さんが優しくして欲しいって言ったんだろ？　こんなに気持ちよがって、感謝の一つもしてくれよ」
「らって、敏感なりすぎて、変なの、っ」
言葉通りシアは悪戯に胸の頂きを弾いたり、脇腹に指を滑らすだけで小さく体を跳ねさせ悦ぶ。
確かに、シアは比較する必要を感じない位に敏感だと思う。まあそう多いとは言えないが、おれが抱いた女の内では正直ダントツだ。
濡れ方こそ癖があり、下着を濡らしていてもいざ脱がすと、表には湿り気があまりない。中は潤い準備万端でも、入口が滲みるらしく顔をしかめていたり…という事はあるが、ヘタクソでも童貞でもないので、おれは特に問題を感じてはいない。外からも濡らしてやれば良いだけだからな。
むしろ、中から滲み出てくる前に濡らした指を突き入れて、どんなにか潤っておれを待ち望んでいたか確かめるのも悪くないのだ。
痛めつけるより、快楽に我を忘れる寸前の、理性と欲望の狭間に揺れる貌が堪らなくおれを刺激する。
「あっあっ！　ゆびっ、増やしたらぁ、ぃ、くぅ…！」
「一本でもイったろ。もう中が小刻みに締め付けてるぜ」
「いやっ、意地悪、ゆわにゃっ、ぁー！」
腹側の僅かにざらつく突起のある部分を指の腹で擦ると、とぷりと溢れた液体が指を伝う。今度は少し強めに抜き差しを繰り返し、好きらしい奥側の愛撫に入ったのだが、軽くイってしまったのでシアの体を起こしておれの右半身に抱きつかせた。いや、流石にうつ伏せ四つん這いの相手は、痛む体がついてかなくてね。
「も、ひれてくらしゃい…」
はい？
「ウルの、ほしいの」
右肩に縋る小娘は、いやらしく鎖骨を舐めだし、また噛み付いた。
唇は上へと移動し、耳朶を甘噛みし吐息をおれへ届ける。
「『はやく』だって？　上等だよ。泣いても喚いても止めねーぞ」

シアは嬉しそうにおれの言葉を聞き終わると、おれ自身へ腰を沈めた。こら、結局お前さんが耐えらんねぇんじゃないか。
「あはっ、あ、おっきいの、久し振り…」
「一気に行ったな、大丈夫か」
「すこし、待って」
力も抜けていたし、自重で予想外に全て収まってしまったんだろう。
つか、挿入自体がそういえばあの再会後の雪山振りじゃねーか…からかいはするものの、一線を超えてもまたもう一回とはならんよーに、おれがうまい事距離を置いていたからだが。
おれも、なかなかの臆病者だぁな。
「んっ、んーっ、あふっ…」
おれの大腿に手を置き、シアは膝立ちの格好で上下に動き出す。やはりと言うべきか、しっかり中は潤い、腰を上げる度にきゅうきゅうとおれを締め付ける秘所から、ぐちゅりと湿った音が聞こえる。
とうとう、シアが目を閉じ、膝からペタンと崩れてしまう。
「も、だめ、足動けない」
「全く、ひ弱だなー。それでよく怪我人に乗っかったもんだ」
「こんなに気持ちいいと、お、思わなかったんだもん!」
はいはい、とおれはがくがくしている膝をよいせと立ててやり、ザザミのような蟹類がハサミを下げた形に足を広げさせる。
よし、また一つ教えてやるとするか。
「前後に動いてみろ。膝が落ち着いたらさっきの格好に戻して良いから」
「前後…って?」
「お前さんの好きな所、擦り付けるよーにして腰を前へ。入れてるおれのをちょっと締めながら後ろへ、かな。
慣れてきたら丸を書くみてーにしてご覧」
大事な所をぱっくり広げられてるのに、シアは興味深く聞いている。この一点集中というか、視野狭窄というか…いや、まあいいや。

「ほれ」
「やぁあん！　はひぃ…！」
少し強めに腰を使ってやると、中をきゅんと締め付けて、ようやっと動き出した。
「まえ、うひ、ろ…っ！　まぇ、う…やあぁっ…ぁ」
「律儀すぎ、まあ頑張れ」
抜けてたモノがまた分け入ってくる感触が好きなようで、開きっぱなしの唇が言葉を成さない声を紡ぐ。
おれにはそう強い刺激にはならんものの、揺れる小振りな胸やそのツンと尖った頂きやら、眺めているだけでもなかなか楽しい。
「あんっあっ、はぁっ、ウル、ぅ！」
「…ん、なに」
「ウルの、おっきいの、すごいきもちぃ、よぉ…！　いっぱい、ん…っ、してっ！」
シアが息を飲む毎に、きゅうきゅうと絞られる。イキながらおれをもっとと求める姿は、欲求に忠実なケモノのようだ。
「そんなにおれの事が好きか？」
腰を上下に使い始めたシアに顔を寄せ、囁くと小動物のようにひゃんひゃん鳴きながら抱き着いてくる。
「しゅきれすぅ、ウルしゅき！
も、ずっと一緒にいてぇ…っ！」
「…っ、バカ娘」
おれは思わず振動が響くのも忘れ、腰をがつがつと使ってシアを責め立てた。
狭い締め付けからきつさが取れ腟内が蠢き、おれを包み込みつったっぷりと濡れた肉壁が、またきゅうきゅうと搾り上げる。
悲鳴のように高く、長い嬌声のあと、愛しの小娘は意識を手放した。
僅か残った理性が駆り立て、自身を引き抜き彼女の体へ、おれは白濁をぶち撒けた。
白い肌に、飛び散る精。

征服欲もさる事ながら、何故かおれは安堵していた。

―

―

―

眠ってしまったシアの体を拭き清め、辺りを見回すが何処に投げたのやら衣服が無い。面倒臭いのでそのまま寝具を掛けた。おれもそこに潜り込み、狭いなと思いつつ目を閉じる。

年貢を納めさせられた、っつーやつか。

この表現だとおれがプレイボーイみたいだが、全くそんな事実は無いのはお分かり頂きたい。狩りなんてもんで生計を立てていると、季節が過ぎるのがやたら早いのだ。

シアは、確かに典型的な『可哀想な子』ってやつだ。

…お脳の中身という問題ではなく、生い立ちやらって事で。

単純明快なのは生来のものだが、それがなりを潜める程、人見知りがひでえ、初めて仲間と引き合わせた時は本当に父親から離れない赤ん坊みてーだった。

今まで何も問う気はなかったが、此処まで慕われては気にならない訳がない。

「ユクモ村での湯治は、後回しだな」

燼滅刃が戻って来ない内に、やりたい事が山程出来ちまったな。

まあ、この小娘と付き合ってると悪運が強くなるみたいなので、何とかなるだろう。

取り敢えず、柄がポッキリのツキヲイザナイの代わりを作らねーと。

修理に出したユクモ天装備は、直ってっかな。

「ウルにぃ」

先程までの色気は何処へやら、寝惚け眼で小娘がまったりした声で呼んでくる。

おれは黙って、その艶めく黒髪をくしゃくしゃとかき回した。

隣で誰か寝てるなんて、めんどくせー。なのに、睡魔がしっかりおれを誘う。

「一緒に寝よ」

言われなくても、だ。相棒。

…　end

娘立ちし日、空が哭く

一閃。

とは、ハンマーに似合わん言い方だったろうか。

素材ツアー中、『運悪く』遭遇したイャンクックの頭に愛槌ベルダーハンマーをかち上げ、エリア中に断末魔の何処か可愛らしい悲鳴が木霊する。

どうやらとてもいい一撃だったようだ。ようやっと戻ってきた感覚に、思わず安堵の溜息をつく。

鎖骨骨折とかいう事態になり、治癒に十日はかかると診断されたおれであったが、やはり治癒するのとハンターとしてバリバリ動けるかは別だったらしい。

ちまちまと近場の素材ツアーや採取クエストを受け、慣れて大振りのハンマーを力一杯振り回せるまで、一月近くかかってしまった。気づけば季節はクソ暑い夏ですよ。ま、包帯だの何だの巻かなくて良くなったからいーけどな。

「もう特産キノコは懲り懲りだっての」

思わず漏れた本音に、反応する相手は居ない。今日は珍しく相方は不在なのだ。何かと纏わりつくあいつが、防具の強化だと知り合いと出掛けており、まんじりともせずこうしてクエストに出てきてしまっている。

剥ぎ取りを終え、モドリ玉でベースキャンプへと戻る。キノコを納品、依頼を果たしてネコタクを待つ。

今日はあいつの飯にありつけるだろうか。

……

「ハンターさんハンターさん、回り道しても良いかニャ？」

帰路の途中、アプトノス車の御者アイルーが振り向き、耳を伏せて（どうやら怯えながら）声を掛けてきた。

「風が怖いのニャ…」
たるんどる、とは言わないが、こうして人間と関わる仕事に就くアイルーは勤勉なものが多い。また人間好きなもの、好奇心旺盛なものが殆どなので、仕事中にこうした事は滅多に起こらないのだ。
経験上、アイルー達が落ち着かない時は異常気象や天災の前触れである事が多かった。
（逆に、多少の地震なら慌てず騒がずだから有難いよ。こっちがびっくりするくらい）
自慢のエピソードを語る相方が思い起こされて、少し和む。
しかし、どうやらそんな事態ではなさそうだ。
独力ではすこーーし、厳しい気がするので、迅速に村へ戻る事にする。
御者アイルーに声を掛けると、彼はうにゃうと返事をした。
その時、頬を撫でる風が一迅。
（まずいっ！）
「伏せてろっ！」
アプトノス車を飛び出し、ハンマーを構える。
やはり、『風』といったらこれか。
普段の堂々たるいぶし銀の体躯は赤錆に塗れてはいるが、そこには確かに、巨大な翼を広げ飛ぶ鋼龍クシャルダオラの姿があった。
錆びたクシャルダオラ。金属に似た身体の錆により、神経質で凶暴、動きこそ多少鈍くなるが危険な個体だ。
まさに赤錆色の鋼龍は、翼をはためかせながら何が奴の気を引いたのか、こちらへ突進してくる。
応戦するしかない、おれは愛槌ベルダーハンマーを構えた。
ユクモノ天一式装備、スキルは見切り、回避性能…そして、本日おれが装飾品で付けてきたスキルは『採取＋1』。
……はい。
ガンバリマス。
突進をブシドースタイルで避けるも追撃は叶わず、風圧に思わずよろめく。羽ばたき口から出る竜巻をこちらへ飛ばしながら、鋼龍はこ

ちらを睨んだ。おれが何したってんだ。
生憎、奴の風圧への常套手段である毒武器もいつも持ってくる奴がいねーんだ、やれても撃退が精一杯なんだよ。
「ハンターにゃん、くるにゃぁぁあ！」
噛んでる噛んでる、と思わず苦笑する。ブシドーを駆使して接近し、邪魔な風を抑えにかかるが、やはりそこはコイツ。上手く首を振りハンマーの動きから逃げ、被害を最小限に抑えてくる。
とにかく、この風を何とかしねーといけないので、ひたすら頭を狙いつつ、飛ばれた時にはアプトノス車に竜巻が走らないよう気を配る。
「ネコ太郎！」
「ハニャーー！　ハンターにゃん、気球がチカチカしたニャ！」
気球？　観測隊のアレだろうか、モンスターの位置を教えてもらったりと初心者の頃には世話になったもんだが…
溜めを不意の噛み付きに邪魔され、地面に転がる。そのまま飛び出すようにダッシュしハンマーを振り上げた。
耳障りな悲鳴と共に鋼龍が転がり、風を抑える為の角破壊も、そう遠くないと感じる。
「ネコ太郎！気球が、どうしたってー!?」
勢いよく、体勢を立て直そうと跳ね起きた鋼龍の俯き加減の頭に回りながら一発目、遠心力で二発目…あ、実は溜め過ぎちまったもんで。

ギャッ、ギャと小刻みの悲鳴が合間に聞こえ、ラストのかち上げで完全にヤツが目を回した。うーん、ハンマー冥利に尽きるぜ。誰かいたらもっと良かったんだが。
「ここにっ、いるぞぉぉおーー！」
おれの真横をすり抜けた影。
束ねているのに自由な長い髪が、兜からはみ出している。重く見える甲冑が、軽やかに躍っていた。
蒼白い、独特の雷のようなフォルムの双剣はキリンのものか。おそらくは防具により、属性の力を引き出されているようだ。

しかし、残念な事に錆びたクシャルダオラは原種と効果的な属性が変わってしまう。元々よく効いていた雷属性があまり通らないのだ。

そんな解説をしていても仕方が無いので、素早く得物を研ぎ、現れた影――エルドを窺い攻撃に参加する。

目配せ一つで自然に、双剣は潜り込むような特有のステップを踏み、おれに頭を譲る。すまねーこってす。後ろ脚はかてーだろうに。

「すまん！　わしもまさか錆びてるとは思わなんだ！」

「おれは遭う事すら知らなんだ！」

軽口を叩くと、エルドはにんまりと笑って「倒すのは骨が折れそうだな？」と問うた。無論、速攻で頷く。

鬼人強化が途切れた事が無い、とはどの地方のハンターの宣伝文句だったかな。目の前の奴の事では無かったと思ったが。

角が折られ、尻尾の千切れかけた錆鋼龍が怒りに燃え飛び去るのは、数分後の事だった。

……

「助かりましたニャ、こんな珍事そう無い事なのニャ」

だから、と続ける御者アイルーを制し、おれはポーチを探り目当ての草をくれてやった。帰りを待つ猫共への土産だったんだが、まあいいさ。

「おぬし出来た猫だのう、お陰でアプトノスも逃げず、こうして無事帰還出来るわい」

同乗しているエルド。どうやら話を聞くに、燼滅刃が現れそうな場所を目星を付けつつ巡回しているのだそうだ。観測隊とも協力関係にあるそうで、やっぱ元研究所員は違うねえ。

「この所静かでな、つい雷双剣なぞ担いだらこのザマよ」

「ま、燼滅刃のせいで環境も不安定なんでしょうな」

兜を脱いで髷も解き放ったエルドは、文字通り自由人だ。ギルドに

も研究所にも認められて、今のように有事の際には協力が得られている。圧倒的な実力がそれを可能にしていた。
「ランスのお主と共闘してみたいもんだな」
「はぁ、もう暫く触ってませんがね。初心者の持ち物みたいなモンしかないくらいすわ」
石ころでも踏んだのか、車がガタンと揺れ、おっとと、と声を漏らしながらエルドが言う。
傾きかけた彼の水筒を支えてやりながら、それに応える。
「いいランサーに会いたいもんだ。わしも使うが、どうも専業には劣るね。
――シアの御父上は、優れたランサーだった。不動のヴィンセントを知っとるか？」
おれはかぶりを振る。
そうか、お主はポッケ村出身だったかと彼は思い出したように続け、とある地方の貴族の名を出した。
それなら聞いた事がある、豊かな鉱山の近くで良い金属製の武具が作られると有名だった。しかし今はモンスターの影響で鉱山も深くまで採掘が出来ないと、新たな事業に手を出していると噂に聞いた。

そこまでをざっと話すと、エルドは視線を落とした。
「貴族お抱えのハンターが、そのヴィンセントだ。『不動』の二つ名はそれ以上でもそれ以下でもない、素晴らしいランサーだったよ」
過去形の結び。
シアの両親は亡くなっていると聞いているが、しかしそんな、ハンターだったという話は全く聞いた事がない。
「あの頃は、わしも若造でのう、まだ太刀ばかり振り回しておったわ。彼に手解きを受けたくてわざわざ出向いたのよ」
エルドが手解きを請う程だ、さぞ名のあるハンターだったのだろう。
「わしが鉱山付近に向かい来るバサルモスの群れを狩っとる間に、大嵐が来たのよ。ヴィンセントが独りで向かわされたのは、謀（はかり

ごと）だったのだと後で気付いたわい」
　エルドの水筒から、ツンと酒臭がした。おい、こいつ狩りに酒持って来てやがる。
「大嵐の主と、ヴィンセントは相討ちになってしもうた。手当が遅れて脚を失ってしもうたのだ、それがもとで、病で亡くなった奥方の後を追って行ったわい」
　どうしてわしはあの日、大量のバサルモスなんぞ喜んで狩りまくったのか、と水筒を握る手が震えた。
「大嵐の主って、先刻のアレか」
「……そうだ、まさかヴィンセントの命日に、当のクシャルダオラに遭うとはな」
　シアの父は、何らかの策謀でクシャルダオラに立ち向かわされたという訳か。貴族のお抱えならば、きな臭い事にも関わっていたのだろう。シアがポッケ村に来た頃の風評はあながち全て的外れでもなかったのか。
「わしとした事が、感傷的になってしもうたな…すまなかった」
「狩り中に酒なんて、どこまで自由人なのかと思っちまったぜ」
　軽口を叩くと、いつもはアネットにバレるからしないと笑って彼は答えた。いや、バレなくても止めとけよ。
「シアを見つけた時は、心底驚いたわい。ヴィンセントの娘がハンターになっとるなんてな…」
　おれは、ユクモノカサを脱いで髪をかきあげた。頭を抱えたいような気もする。
　父親と同じランサーを見つけてまとわりつくなんて、どこまでヒヨコなんだピヨピヨシアめ。
　思いがけずちょっとフクザツな気分になってきてしまったおれは、エルドの水筒から一口拝借する。強い酒だ、芳醇な香りと喉が焼けるような感触。
「次は」
　思いがけなく、軋む歯車に油をさしたように、おれの口が滑らかに言葉を紡ぐ。

「アレを仕留めますかね」
別に素材が要るとも自分の村の危機でも何でもないけども。（いや、未然に防ぐ事にはなるが）
「……そうだな、わしもたまに使いたい武器があったわ」
にやり、とエルドが拳を突き出す。
同じように拳を軽くそこに当て、柄にもなくおれも儀式に参加した。
まーた素材集めか、ソロはめんどくせーな。

……ｅｎｄ．

しのぶれど

ああ、久し振りに熱い闘いだった。
始まっていきなり狩りは終わっているのだが、たまにはそんなのもアリだろ？前もそう？気のせいだって。
おれは砂漠でティガレックスを狩り、ようやっとベルダーハンマーの強化素材を手に入れた。
いやータマミツネのハンマーも強化の爪が面倒だし、修理するにも物入りで、家に置きっぱなしなのである。
本調子に戻ったと思われる身体だが、やはり疲れが出るのが早い。
おれは静かな洞窟の中で、一時の休息を取る。うざったい小蟹は処理済みである。
不意に地べたがもりもりと盛り上がり（形容詞がこれしか見つからない）、先程の瀕死のティガの窮鼠の一撃を喰らったオトモのシルビアが姿を現した。
「アタシの白毛が台無しだニャア…」
「おかえりなさいませオトモ様」
「ニャフン。それは皮肉以外の何物でもないのニャアー！」
久々に狩りに連れ出したシルビアは、からかっても何処か嬉しそうに、ニャーニャと何の為かわからん準備体操をしている。
「ご主人、ティガも狩ったしすぐ戻るのニャア？」
わくわく、と言うか、爛々、と言うか。目を輝かせておれを見上げるシルビアに、たまの御褒美をくれてやる。
「いや、少し採取してから帰る。メシ食ったら行くから、先に草でも見てろ」
「ニャニャーア！」
歓声を上げ、フトコロが広いニャア、と続けたシルビアはポーチの整理も早々に四足で駆けていく。
この間、マタタビの土産は御者アイルーに渡してしまったからな。存分に取りに行って来い。
おれは荷物の中から支給品の携帯食料を取り出すが、気づけば空腹

を凌げるか…という量しか無い。
あまり気は進まないが、肉焼きセットを準備する。突進してくる邪魔なアプケロスをぶん殴って剥いでおいた、柔らかい腹部の肉を薄く切り、本来クルクルと回す部分に近づける。炙られて出た肉汁を金属部に滴らせると、テカテカと油が馴染み眩しい。脂身の多い部位を先に炙り、塩で頂く。ちっとしつこい脂にはあっさりした味で十分だ。
実は臭みを取る為に胡椒をまぶしておいたので、それこそ狩ってる間に下拵えである。
え？
料理ぐれー御茶の子さいさいですて。独り身が長いとこうなるもんだって、違うか？そうか残念だ。
「あちち」
村長に貰った豆を発酵させて出来た茶色い漉し汁、少しかけてみると旨い。掛けてから炙ると焦げた香りが鼻腔を刺激して、食欲が湧くのである、飯が欲しい。
生憎と狩りが生業の男なもんで、細かな調味料がナンタラとかは語彙を用意してないが、このヒシオだかいうタレは本当に旨いな。
アプケロスみたいな活動的な肉より、ズワロポスみたいなあまり動かない柔らかい肉には合うだろうか、気になる所ではある。イャンクックの砂ずり食いたくなってきた、あれは塩胡椒が鉄板だが、香草みたいなもんと一緒にヒシオで炒めるのもありだな。
なんて肉談義を頭の中で行っていると、背後から気配を感じた。ハンターという訳ではない、小さい気配だ。襲ってくる訳でもなく、ただひとところからおれを窺っている……
ぐうぅ
「ふにゃっ」
ああ、肉の匂いに誘われてきたのか。どうやら幼いアイルーのようだ。
此処は確かに、猫共の巣から遠くないから仕方ないか。それにしても警戒心はねーのかと。
「ふにゃんにゃん、にゃー！」

「ん？」
先程のシルビアの如く目を輝かせて何かを訴えかける幼アイルーは、己の腹の音で見つかったと分かるとこちらに近付いて来る。
とてとてと二足歩行、ではなく素早く四足で、だ。
「しょうがねえな」
ふにゃふにゃと、人語も話せぬチビ猫が一生懸命訳の分からん猫語でおれに纏わりつきだす。おれは、お前のとーちゃんか。
何処かで言った事のある台詞だと気付き、おれは思わず笑ってしまった。
おれの食ってる肉は流石に幼い口には味も濃いだろう。臭み取りをした肉の、胡椒の薄いだろう場所を薄く削ぎ切る。軽く炙ってからくれてやるか。
いや、ちっちぇーから、生はどうかなと思っただけだ。よく焼くと猫舌で飛び上がりそうだし。
チビ猫は喉をごろんごろんと今にも頭が取れて落ちるんじゃねーかと思うくらいに鳴らしながら待つ。
炙り終えた肉を掲げて欲しいかと問うと、またふにゃんと鳴いた。やや人語は解するようだ。
その辺のデカイ葉っぱの上に肉を乗せてやると「ふにゃにゃにみゃふ」と手を合わせる。ネコバァの所に行く前の前段階ってとこだな、猫共も巣で勉強してんのか。
そうこうしてるとチビ猫は食べ終わり、おれは焼いてやっていた肉が尽きたのに気づく。また少しだけ炙ってやり、チビ猫は喉を鳴らして待つ。
「ご主人、まだ来ないのニャア……ニャッ!?」
「おおシルビア、すまん」
「ニャッニャ！ご主人何処でそんな小さい子を見つけたのニャア、乳離れしたばかりみたいな年の頃ニャア」
やはりそんなもんか、こんなチビで人語話せねーもんな。
驚いて足早に近寄ってきたシルビアに、チビ猫が耳を伏せて尻尾を股の中に入れて小さくなる。しかし口にはくわえた肉がもぞもぞ動

いている…背に腹は替えられないとでも言いたいのか。
「肉焼いてたら寄ってきたんだ、攫ってなんかいねーぞ」
怯えるチビ猫にそっと鼻を近づけ、シルビアが挨拶をする。モンスターの血の臭いに怯えたのだろうか、ぶるりと身体を震わせたが、すぐにチビ猫もごろんごろん言い始めた。
「なんつー豪胆なヤツ」
「この子多分、ほんとにちっちゃいニャア。大人ならもっと警戒心もあるし、ネコバァに連れていって貰う為にも、人語を話せるようになるのはアタシ達ヒトと生きるアイルーにとって急務なのニャア」
「そうか…巣の様子を見てきてくれないか」
一抹の不安が頭を過ぎる。
シルビアは二つ返事で洞窟を駆け出して行った。

……

間違って、パレットの隣に出した絵の具を混ぜてしまったような、サバトラに茶の混じった変わった色合いの模様。
先程は気付かなかったが、アイルーにしては短い手足（それで尚の事幼く見えたのだろう）と、割と変わったアイルーだ。口減らしってこたぁねーと思うが、何とも可哀想な風体である。緑がかった黄色の目ン玉した顔立ちは、そう不細工ではねーけどな。
「チビ猫、腹ァいっぱいか？」
「ふにゃお」
満足そうに一声鳴いたチビ猫は、こっくりこっくり舟を漕ぎ始める。おい、赤子か。
カクンと頭が落ちると、慌てて頭をふりふり、おれを見て何か、うにゃうにゃ口の中で喋りながらまた舟を漕ぐ。このループ、絵姿じゃ収められねーしな、笑えるのに。
「シアって呼ぶぞ、チビ」
おれが呟くと、もうチビ猫はおれの腿に頭を乗せて完全にオチていた。

地面がもりもりとまた盛り上がり、シルビアの姿が現れる。
きっと、おれの悪い予感は当たっているんだろうな。

……

「あ、あんまりこういう事がまかり通ると思わニャイ事ニャ！」
「やむを得ない事情があるのニャア、お願いしますニャア」
帰り道のアプトノス車。
以前世話になった御者アイルーだったのをいい事に、マタタビで買収。シルビアの集めていた量がかなり多かったのが役立ったな。ポケットにあんなに押し込んでるとは。
「砂漠の猫の巣が倒壊とはニャ…ボクの巣立った場所ニャ、今度お休み貰って見に行くニャ」
「ネコ太郎は砂漠の生まれか。シルビアに見に行かせたが、入口が崩落していて、奥からもうんともすんとも言わなかったらしい。無事に脱出は出来ているだろうが、コイツはちょうど狩りの練習にでも出てたんだろーな」
丸くなってシルビアの腹を揉みながら、チビ猫が寝ている。揉まれているシルビアも、ウルク装備のまま釣られてうっかり寝てしまったようだ。
溜息をつくネコ太郎。おそらく燼滅刃の影響か、他のモンスターも活発化しているんだろうか。厄介な奴だよ本当に。
しかし、どーするよこのチビ猫。

……

「こねこぉっ…!!」
第一声は、予想通り目を見開いて上ずった声で。
一緒に出迎えたオトモアイルーのリンは、即ゴロゴロ言いながらおれの腕から飛び出したチビ猫が鼻を擦り付け挨拶しようとし、横っ飛びに回避していた。

「コラ、だめニャア！チビはこっち来るニャア」
シルビアが手招きすると、尻尾をピンと立てて四足で走り寄る。その様子を目を丸くしたまま見ていたシアが、漸く我に返る。
「ご飯、食べながら話聞いていい？」
「おお、取り敢えずこいつも頼む」
「ふにゃあお」
ひとの台詞に被せて鳴くんじゃねえよ。
俺ん家に入ると、慣れたもので台所からシアが食事の支度をして、食器を運んでくる。
重くはないが、家で寛ぐには邪魔な装備を脱ぎ、汚れ物を留守番していたオトモのネルに預ける。汚れというか、肉の香りが染み付いていたようでネルは鼻をヒクヒクさせて受け取っていた。
ガブリブロースをヒシオやハチミツやらで煮込んだ柔らかい角煮、白い根菜を食べやすく細切りにした上に、素揚げの野菜をばらばらとまぶしたサラダ。主食は米だそうなので、丼にしてくれと頼むと、彩りよく茹でた青菜と共にタレの照る肉！角煮丼が運ばれてきた。
「ティガレックス、私も行きたかったなぁ」
最後に薄切りにしたキノコと青菜の浮かぶスープを運び、シアが席についた。
確かシアは毒の片手剣を強化するとかで、縄張りを広げてきていたドス含むイーオスの群れの狩り依頼を受けていた。ハンマーで奴らを相手するのは面倒だったし、シア1人で十分だろうと踏んだおれはガン無視してティガレックス討伐に出発したのだが、数が数で時間がかかってしまったのだという。
「お夕飯も、殆どリンが用意してくれたし」
オトモ兼キッチンアイルーってのは、かなり重宝がられる人材のようである。まあこいつが特殊らしいのだが、ネコバァが紹介するのはどちらかに特化した猫なので正直羨ましい。
シルビアでもネルでも良いから、料理習ってくんねーかな。まあ大体畑仕事ばっかやらせてるけどな。
「ボクは表向きオトモアイルーだから、あんまり外で言い触らしたら

ダメニャのよ旦那さん」
　ごめんごめん、と形だけ笑いながら謝る。まあ、それは自分のアイルーをとても好いて信頼しているシアには有り得ない事ではあるが。
　昔はむしろキッチンアイルーに近かったからニャー、当然なのニャ。とそれに喉を鳴らして応えるリン。シアと同じ位の年数生きていると以前聞いた事があるが、やはり猫の方が精神年齢が高くなるものなのだろうか。
　しかし、とろける肉が箸で掴むと、ほろりと崩れる様が堪らなく良い。甘味のあるタレが最初はくどく感じるかもしれんが、なかなかどうして、癖になるのだ。
「チビにはこっちだよー」
　とろとろの角煮を、急遽タレをなるべく薄めにするためダシ汁で軽く煮たのだそうだ。フロストエッジの近くに置いて慌てて冷ましたという肉の皿を、もう1匹のシアのオトモアイルーである緑縞のハクサイが運んでくる。
　フロストエッジは武器庫に仕舞われずに、台所の隅の貯蔵庫に。シアよ、それでいいのか。
「母性本能がやばいニャ、頂きますを言えきれてない辺りが堪らニャイニャー」
　シルビアの隣で食べ始めたチビ猫を眺めながらハクサイが呟き、シルビアもまた強く頷く。
「アタシ、モミモミされて母乳出るかと思ったニャア…」
「ぶふぁ！」
「シア、汚え」
「お絞りくらい取ってよウルのバカ！」
　鼻に米粒が入ったようで、おれと同じく角煮丼を頬張っていたシアが涙目で噎せている。しょうがないので言う事を聞いてやり、序でに鼻紙も取ってやる。すぐに米粒の呪縛から解放されたらしく、鼻紙を捨てながらありがとうと言われた。
「チビ、畑に連れて行けるのか？」
「多分…まだ無理だと思う、ニャア」

おれの意図を察してか、ネルよりも年長のオトモであるシルビアが答える。要するに、猫2匹で何とか回している雑務から1匹抜けて、チビを使い物になるよう鍛えねばならんってこった。ネンチャク草は誰が栽培するんだ！虫の養殖もあるし、うーむ。

「チビ、うちに来る？

リンちゃん、大丈夫だよね」

シアがチビを撫でながら、隣の愛猫を窺う。願ってもない申し出だが、お前さんは良いのかと。

「あっ、あのね、十日までは要らないけど、少し休みたくて」

「おう、アレか」

「はい、アレです…理解が早くて有難いです」

画面の向こうの良い子の男子は、正面きって聞くと逆効果になる場合があるから気をつけるように。

おれは狩り中に、ぶっ倒れたシアの介抱を…って、おれは本当に男として見られていたのか疑問に思う。一から十までやった訳ではないが、女の身内レベルだろあんなん出来るの、普通ビビるぜ。大型の狩り依頼じゃなくて良かった。

って、まあこれは置いといて。

体調を崩すシアの為、リンが家に居残るそうなので、有難くチビを預けることにした。

もう1匹のアイルー、ハクサイもベテラン。在庫がゼロにならない程度に素材玉や光蟲を補充出来るよう分けてくれるそうだ。

「わりーな」

「ウルのじゃなくて、チビちゃんの為だからねっ」

言葉と裏腹に、顔はゆるっゆるに緩んでいる。シアめ、だから『カンタン』って言われんだっての。

おれは何も言わず、肉を平らげて毛繕いを始めたチビ猫を眺める。視線に気付いて、チビは言った。

「だんにゃしゃま、にゃあ」

おう。

まさか…シルビアやおれ達の会話で覚えたのか？

流石おれの拾った猫、将来有望じゃねーか。なんつて。
「ああ、チビ、シアにも礼を言えよ。世話になるんだぞ」
「ふぁい、にゃ」
ごろごろ、さっき見たような緩んで蕩けそうな口元をさせて、チビ猫は軽やかにシアの膝に飛び乗り、短い前脚で太腿をフミフミしながら「ふぁにゃにゃのん」と、これまた聞き取りにくいニャン語？人語？を発した。
「おー、乳飲み子よ、胸よりアシのが柔らかいってか」
「うるさい！流石に揉める位のおっぱいあります！」
いーっだ！と、ガキっぽさ丸出しの相方。チビ猫といい勝負だぞ。

……

チビに洗い物を教えながらの食事の後片付けも終わり、疲れた猫共も寝静まり。
「なあ」
なーに、とアイテムボックスを前に、明日武具屋へ持っていく強化素材を整理していたシアが間延びした調子で返事をする。
おれにしては珍しく、それから二の句がなかなか告げず、聞こえなかったと勘違いしたシアがこちらへ寄ってきた。
「あー、何で毒片手剣の強化を？」
我ながら、何でこんなインタビュアーみてーな聞き方。いや、おれにも聞きにくい事くらいある。
少し躊躇ってから、シアはおれを寝室へ導いた。いやん。
「ちょっと！勘違いしないでよ座って話したかっただけ！」
「そんな、てっきりおれは身体に教えてやる的なやつかと」
口をへの字にして、おれの二の腕をぺちんと叩く。乱暴にベッドを軋ませて座り、おれが隣に座るとシアは話を続けた。
「クシャルダオラを見掛けたって聞いて、何だか居ても立ってもいられなくて。
――お父さんの話、エルドさんから聞いたんでしょ？」

おう。まあ、本人から言って下さるならまあ聞きやすいけども…エルドの奴、口軽いなオイ。
「うち、ちょっと偉い貴族の方を護衛する事が多くて、騎士でもないのに召抱えられたんだよね。
ハンターとして契約、というより、本当に気に入られて隣のお屋敷に住まわせて貰ったりして。お父さんも王立騎士隊には入りたくないってずっとごねてたし…凄く珍しい事だったみたい。ハンターになった今なら分かるけどね」
その後は概ねエルドから聞いた話と同じ、父ヴィンセントがおそらく他の貴族の謀略でクシャルダオラの討伐に行かされた事、手当てが遅れハンター引退どころか亡くなってしまった事が続く。本人の口から聞くのは、やはり少し、堪えるな。
「クシャルダオラがどうこうより、嫌がらせしてきた貴族に復讐してやりたかったけど…召抱えてくれた貴族のおじ様も何でか圧力をかけられたみたい。
頑張ってはくれてたんだけどね、お父さんの知り合いもポッケ村に行かされて。申し訳ないしクソハゲ貴族のセクハラにも耐えられなくなってきて家出しちゃった」
毎日通ってきては、喪服の私を口説いたり触ってきたし。デートの誘いも行こうが断ろうが噂話になるしね。ほんと、良いご身分。
と吐き捨てるようにシアは言い、布団を叩く。
シアは明言しなかったが、まあ性的なアレコレの嫌がらせもあったんだろうな、男性恐怖症もどきとはいえ、本当に内向的だから。
「で、後ろ盾の貴族とやらは放ったらかしでリンと逃げてきたと」
「まあ、ポッケ村に行かされたハンターさんに手紙を書いてくれて、家出の手伝いはしてくれたよ。後は私が遺書もどきを書いて、何とかなりました、多分」
多分、かい。
いやー真面目に、落ちぶれた都会のお嬢様がハンターになりました、と。物語もいいとこだぜ、相手がおれみたいなオッサン間近ってのがリアルなファザコンさ出てるけど。

「んで、お嬢様はナイトの代わりに、おれという敏腕ハンターを家来にしたと」
「家来！完全に私の扱い雑だけどね！」
ハイハイ、と噛み付いてくる小娘の頭を撫でて黙らせる。
「お脳も可哀想だと思ったが、なかなかお前さんも大変な娘なんだなー」
「……めんどくさい？」
「面倒臭い」
言い返せない時は、真面目に凹んでる時。
口をへの字にして俯く小娘に「大丈夫、扱いはカンタンだから」と言うと、軽い頭突き？体当たり？を喰らった。寄り添うならもうちょいこう、可愛げのある…
「まー、いっか。乗りたかったな玉の輿」
……あれ、反応がねえ。
絶対ツッコミ入れてくると思ったのに。
赤面して、手がプルプル震えているシアがギュッと手首を握ってくる。
「冗談でも、そこまで言ってくれるって、ウルにぃ」
大好き、と呟かれる。
あれ、おれの予想と違う、っつかそう取られるとは。
うーん、おれもそこそこコイツの事が好きなんだなー。何かムカつくけど。
取り敢えず、おれに顔を埋めてしまったシアのガウシカテールを解く。束ねた跡が付いて変なウェーブになった所を弄びながら、ゴロゴロ喉を鳴らす猫モードに入った小娘をじゃらしてやる事にする。
あの、こんなんでも一応ランク解放済みハンターなんで。
そろそろガチな狩りに連れ出さないといけねーな。

ｅｎｄ…

かのひとへ、天釣舟

9．かのひとへ、天釣舟

ちゃきちゃきと珍しく積極的に狩りの支度をする、私の相棒。
懐かしいティガレックスを、あの時と違う得物で狩り、その得物――ベルダーハンマーを強化してきたのは一週間程前の事だ。
少し傷んだ防具も、僅かな修理で済んだお陰か1日で仕上がった。
相棒――ウルは先程引き取った、そのユクモノ天装備を纏い、久し振りに見るとても真剣な横顔でポーチの内容を点検している。
「やっぱり、一人で行くの？」
何度目かの質問を、彼は片手で追い払う仕草で撥ね付ける。決意は固い様だ。
「ああ、タイマンだな」
びゅうっ、と強くなってきた風の勢いがあまりのんびりとしていられない事を告げている。
「ウルにぃ、手堅く行かなきゃいけない時だってあるよ！　ハンマーだって相性悪……いとは言わないけど、でも…」
「あのな、一人なら二回乙れんの。二人ならお前がおれの乙枠取っちまうだろーが。正直に言ってみろ、一式装備作れる程クシャル狩った事あったか？」
長年の付き合いだけにズバズバと痛い所を突いてくる彼に、私はうっと唸ってしまいつつ、武器は作ったもん、と口を尖らせて、せめてもの反撃に出る。
彼だって知っている筈だ、あの頃の私といえば太刀を携えていた頃。その話を持ち出してくるなんて卑怯だ。撃退を繰り返し、尻尾を切れる位に弱った個体の討伐に数度行っただけで、それも切断武器を持っているからという理由で呼ばれたのだ。
勿論彼と離れていた時期に、パーティとはいえ撃退依頼を二度成功させた。身の丈に合った、片手剣使いに転身した今なら、やっとマト

モに役に立てると思っている。これは、慢心じゃない筈だ。
「多分エルドが間に合う筈だ、おれはあくまで先遣で、運良く倒せれば良し、そうでなくても足止め係って訳」
　顔を一切上げず、ホットドリンクと強走薬グレートを見比べている。あ、後者を詰めるだけ詰めた。それ、私が作っておいたんだけどな、有難うの一つもないのが彼らしい。ため息が漏れた。
　目撃情報のあった密林へ発った後に雪山へ移動してしまったらしく、無駄足を踏まされたエルドからの救援依頼（凄く似合わない字面である）なので、彼の面子もかかる、なかなか正真正銘のヘルプなのだ。失敗は許されないのは私だって理解している。
「旦那しゃん、行っちゃうニャン？
　ガネしゃびしいニャン」
　すっかり赤ちゃんネコ語からアイルー語（おかしな事を言っている自覚はある。例えようがないんだよー）を話せるようになった、ウルの拾い子である短足アイルーのガーネットが、真ん丸の瞳で「ねーシアしゃん」と同意を求める。
　この子が拾われてから暫く、クエストに出ずっぱりだったウルの替わりに彼女を預かる事になった。私のオトモ、つまり先輩アイルーのリンと言葉を勉強したり、下拵えから始まり少しずつ料理の手伝いくらいではあるが、キッチンアイルーの修行をしていたのだ。
　ガーネット、略してガネちゃん。どうもあの短足と、猫らしくない真ん丸の目がユーモラスで、時々本気でこの家に階段が無くて良かったと思う。おそらく彼女は昇り降りが出来ないのではないだろうか…特に、降りるのが。
「ガネはうまいメシが作れるよーになってろ、な」
　こう見えて生き物は嫌いではないウルが、手を止めてガネちゃんの頭を耳ごとわしわしと撫でる。嬉しくて背伸びして頭をすり寄せたガネちゃんがバランスを崩し、こてんと前につんのめって転がった。めちゃくちゃ可愛い…
「おめー、バカだな…」
「ウッ、ワタシ小さいから仕方にゃいのニャ。旦那サンのおてつだい

できなくてゴメンナサイなのニャ…」
そうしていると、支度を整えたウルのオトモ、シルビアがとてとてと新調したマフモフ防具をくるくる回ってニャフニャフ喜びながら私に見せに来た。
真っ白い体毛にブルーアイズ。　美しい外見にそぐわず、この子はアシストアイルーとしてなかなかの腕の持ち主だ。巨大なブーメランがガノトトスの巨体を頭から尻尾まで貫通した時は驚いたものだ。
罠師スキル持ち片手剣泣かせの毒々落とし穴までしっかり持っている。
しかしクエストに出られなくとも、腐らずネンチャク草を栽培してはベタベタになってうちに愚痴りに来る。ウルの扱いの雑さは分かっているつもりなので、お風呂に入れてあげては時々農場を手伝って貰う仲なのである。
と、まあ色々喋ってみたものの、やっぱり心配は拭えないし着いていきたい気持ちは収まらない。
そわそわしている私を横目で見たウルは、私の頬を親指と人差し指でうにっと挟み、物騒な目つきで一言。
「物理的におねんねさせられたくなかったら、いい子にしてやがれ」

……

「ポイズンタバルジン、悪かねーんだけどさ」
風の唸りの残滓が聞こえる、雪山のベースキャンプ。ユクモノカサの紐固く結び直し、おれは独りごちた。
ただの我が儘というか、ちっぽけなプライドの為というか、そう。
「これは証明、なんちって」
ハンターとしての腕前は、ランクの高さだけでは測れない。
G級ハンターの肩書きも過去のもの。
故に、自らが証を立てるしかないのだ。
（そこにランスを使わねーのは、もう意地通り越して妄執みてーなもんだけどな）

エリア1の、比較的天候も落ち着いた地点から、真の入口とも言うべき雪山の頂上に通じる洞窟に辿り着く。半歩遅れて、シルビアが四つ足で駆けてきた。
「用意は良いですか、ですニャア」
「おーよ」
返答には軽すぎる一言でも、オトモは満足したようで「シアちゃんくらい、このレイピアで活躍してみせるニャアよー」とレイアSネコレイピアを振り翳した。
頼りになるネコだ。結構、おれはこいつらにも助けられてたりする。
洞窟を通り抜け、氷の道を行き、歴代の狩人が幾度も使ったお陰か綺麗に段になった崖を登り、雑魚を吹き飛ばしながら、おれはクシャルダオラの吼える声を目指し走り抜けた。
洞窟を抜け周囲が明るくなり、白銀の景色に一瞬目が眩む。
開けた雪原の向こうに、鈍く煌めく龍が悠然と歩を進めていた。まだこちらには気づいていないのか、ヤツの機嫌次第で変わる天候も、荒れる気配はない。
強走薬をガブ飲みし、おれは距離を詰めた。
当然、太刀とかの長物の間合いくらいで気づかれるが、おれは構わず振り向いて怒りの咆哮を上げかける鋼龍のドタマに一撃くれてやる。金属質めいた悲鳴が小さく上がるが、構わず数度殴りつけかち上げた。
流石に、鋼龍の体の周囲に渦を巻いた風の鎧が生まれる。名前だけは聞こえは良いが、戦ってる側からしたらこの風の護りは本当に厄介なのだ。
真正面から撃を交えようとしても、この鎧と、纏う風でよろめかされてしまう。
距離を取ったと思いきや駆けてくる鋼龍をジャスト回避で素早くすり抜け、強溜め攻撃を振り向きに合わせる…つもりが、タイミングを外して後肢に当ててしまった。
こちらを追尾しているかのような、素早い動きだ。読まれていると

は思わんが、おれは舌打ちをした。
まあ、クシャルダオラは頭にくれてやらんでも、弱点なのか尻尾に当たれば気絶の手助けになる。
見やればシルビアも正面の風鎧の厚い所を避けてブーメランで毒攻撃を入れてくれている、少し経てば鎧も剥げるだろう。
風の柱が幾つも襲い来るようなブレスを避け、納刀しおれは閃光玉を投げる。
最近搦め手はシアにやらせっぱなしだったが、腕は落ちていなかったらしく。しっかりと目が眩んだ鋼龍の風の鎧が見えなくなったのを、確認して接近する。
抜刀からかち上げ、ヤツの頭が間近に…
「シルビア！　尻尾だァァァ！」
やや遅れて繰り出される俗称『お手』に、勢いよく吹っ飛びながら、おれは貫通ブーメランを投げていたうちの白猫へ叫ぶ。
そう、間違っていなければ、おれはコイツに一度遭っている。
「ご主人、笛はしばらくアテにしないで…ニャア！」
いつも思うが、どっから取り出したのか身の丈ほどの巨大なブーメランを振り回し、シルビアが尻尾へ上手く定点攻撃を仕掛けた。
吹雪のせいか離れた場所に吹き飛ばされたおれは体勢を整え、回復薬グレートに口をつける。
これは只の勘だ、だがおれの推測が正しければ…それは只の確固たる事実になる。
ほんの、ほんの幾分だけ柔らかく感じる肉質。おそらく脱皮後間もないのだろう。外殻も骨格であるクシャルダオラなので一瞬で硬質化する事は知られているが、一応おれは弱点叩かないと仕事にならんハンマー使い。（頭だけ叩いてりゃ良いってもんじゃないのよ、頭弱点じゃなかった時の、しかもソロハンマーってば悲しいのよ）
一度折れかけたようにも見える、削れた角。
何より先日、エルドと共に追い払ったのは錆びたクシャルダオラだ。
これだけ揃ってこの結論にちいっとでも辿り着かないとしたら、ハ

ンター失格だろ。
おれは、昔のおれを超えてやる。
天災だろーが古龍だろーが、忌まれしものにだってお目通りしたじゃねーか。
タイミングをはかり、フェイントに大振りな溜め攻撃を。振りかぶると、散々頭を殴られたクシャルダオラが泡を食って空へ逃れる。
おれには見えている。
「ニャアアアーォウ!!」
小さな体が伸びきったバネのごとく、瞬間広がり、毒々しい刀身を垣間見せた。
シルビアの獣の咆哮はクシャルダオラのそれを悲鳴へと塗り替えた。
ドシャッと無様に地べたに叩きつけられたソイツを、今度はおれが頭にトドメの一撃。二撃。三撃目で目を回す。
この隙に粉塵を使う。何故って、尻尾の切り手が居なくなっちゃ困るからな。
そして、
「スピニングメテオぉ!!」
先日初めて使って味をしめたこの狩技。ブシドースタイルで回避に偏りがちなおれにはぴったりの火力だ、いや勿論、強溜め攻撃も多用するがラッシュ時の火力がやはり劣るこのスタイルには良いと思う。
(ただし普段は臨戦ばかりなのは秘密)
などと語っている間に一通りの攻撃を頭にお見舞いし、スタンを取る。
狙い通り、尻尾もブーメランがまさに薙ぎ払うように切断したところだ。
鋼の体の至る所に大小の傷が走り、そう戦闘も長くない事が知れた。
尾を斬られ血反吐の泡を吹き、尚も立ち上がるクシャルダオラは突然垂直に飛び立ち、姿を消した。

「なっ…こんなところで撃退なんてさせてたまるか！」
流石のおれらの奮闘も、古龍の再生力の前では双六のようなもんだ。六の目を出すと振り出しに戻るとは、現実で味わいたくはねえ！
慌てて、お馴染みの横穴に飛び込む。狭い雪の道を這って進むと崖に出るのだ。ギルドの観測隊御用達の山頂付近へと続いており、逃げたクシャルダオラの位置を図るにはもってこいの高台。ロッククライミングは面倒だが、背に腹はかえられまい。
「旦那さん、おかしいニャア！
『音が何も聞こえない』ニャア…」
「なに……っ」
アイルーの耳は聡い。食われる側の小さな生き物として発達させてきた能力は伊達ではない。そのシルビアの言葉におれは絶句する、が、ひとまず辺りを伺いながら崖を登りきった。
「まじかよ」
そこには、見るも無惨な光景が広がっていた。
不幸にもクシャルダオラの脱皮に居合わせたのか、血飛沫と防具であろう金属の欠片が火花のように弾けて散り。慌てて回復したのだろう、瓶や秘薬サイズの小瓶が少量バラ撒かれているが、中身の入ったものも交じっている様子からして、そんな暇すら与えてもらえない状態だったのかもしれない。
……と、辺りを観察してモンスターの気配が無いのを確認し、生存者あるいは、言いたくないがその痕跡の発見に努める。
これは、クシャルダオラの追跡は断念已む無しだ。
「頼むぞ…死体背負って下山なんかしたくねーからな」
シアを背負って下山したのをちらりと思い出すが、あれはもうおれの宿命だ、宿業だ。
「……れか……い…」
風にかき消されそうな音…いや、人の声か！
おれは姿勢を低くして、潜り込めそうな場所があるのかと雪を掻き分ける。しかし、元々狭い場所だ、そんなスペースなんて――――
「ここ、ぬけが……はさ……け…て」

やや高めの、しかし男の声だ。いや、がっかりなんてしていない、非常事態だ。お前らおれをただのオンナ好きだと思ってやしないか？
（いや、まあ間違いではない）
声の方を必死に探ると、なんと声の主はクシャルダオラの抜け殻の間に挟まっていた。
少し観察し、自分で何とか出来そうだと判断する。荷馬車が横転した時のように、背を向けて辛うじて手をかけられる凹凸を探し当てると、シルビアに彼を引っ張り出すよう命じた。
「せー、のっっ!!!」
鋼と名のつく古龍の抜け殻、真面目に硬く、重い…！
勢いで持ち上げたのは良いが、柔軟な動きを可能とする為に強度はそれなりなユクモノコテに殻がくい込み、重さで脂汗が滲み出てくる。
とにかくこの体勢を維持する為、と腹に力を込めて踏ん張る。白い塊が隙間に入り込み、ずるずると青い何かを引っ張っていた。
「ネコちゃん、頭装備の金具を外してくれないか、色々マズイ」
「あっごめんなさいニャア！　そのままじゃデュラハンだニャア」
シルビアを視認した後、目を閉じてただ踏ん張るだけだったおれは、腕が出せたお陰で自らおれの股の間から逆匍匐前進してくる眼鏡の男を見てしまった。
爽やかに「どうもありがとうございます」と礼を言われるが、取り敢えずさっさと脚まで出せ。お前の男の象徴ギロチンの刑に処すぞ。
「っは、助かった…」
「……ぐ」
音を吸う雪の上を、小さな衣擦れと金具の音を立てて這い出してきた男の安堵の声。
もう唸り声しか出ず、おれはそろそろと力を緩めて古龍の抜け殻を置いた。体の位置をずらしてすぐに離脱できる程の余力が無かったのだ。
「改めて、助けてくれて本当に助かりました。こんなところで話も何なので、宜しければモドりませんか？」

眼鏡の青ピエロは、少し情けない笑顔でポーチからモドリ玉を取り出した。

クシャルダオラこそ取り逃がしたが、今度の雪山は、人間背負って帰らなくて良いらしい。

…ｅｎｄ．